320-18

箕作元八
峯岸米造 合著

新編西洋史綱

東京 合資會社 六盟館

明治
40 1 11
内交

辯言

中學校の教科書は、學術的著述と異なり、啻に論理的に完備せるのみにては、不可なり。必ずや、よく、その教科の性質目的にかなひ、中學時代少年の、精神發達に適應したるものならざるべからず。これ、教科書撰述の、大に困難にして、功を朞月に期すべからざる所以なり。曩に、著者が、西洋史綱及び西洋略史を撰するや、深く、その材料の選擇、編述の體裁、前後の聯絡、行文の難易等に焦慮し、推敲討尋、稿を改むること、實に數回に及びき。私かに惟ふに、在來のものとは、多少、面目を異にし、その缺點の幾分を補ひ得たるべしと、爾來、數星霜、國運の發展、甚大にして、文教の振興上進、また、曩日の比にあらず。その間、著者自身の研究と經驗とにより、大に悟る所あり。知友、及び、多數教育實際家の助言に得る所、また、甚だ尠からず。つ

ひに、前著改修の必要を感じ、ここに、本書を見るに至りたり。今、聊か、前著を改修したる重なる點を擧げんに、

一、大に材料の選擇排列に注意し、前著所載の事項を增減し、篇章の廢合を行ひ、史實前後の聯絡關係と、その本末始終とを明かにしたること。

一、上古史・中古史を簡略にし、近古史・最近世史を比較的詳述し、殊に、最近世の部には、西力東漸の章を設けて、その由來を明示し、また、現今の局面、及び、わが國の世界に於ける地位を明かに記したること。

一、更に行文を平易簡明にし、中等教育に於て、さまで、必要を感ぜざる固有名詞を、多く減少し、また、なるべく、年代を省略したること。

一、全篇を通じて、文明の融合、大統一理想の消長、各時期の風潮等

を明かにすることに、意を用ゐ、上古・中古・近古等の終りに、摘要を掲げ、その學修したる所を概括して、大勢の赴く所を明示し、かつ、復習に資したること。

一、明確なる智識を與ふるのみならず、大國民として、最も健全なる思想を啓培せんことを力めたること。

一、毎章、出處明確にして、鮮麗適切なる繪畫を挿み、また、處處にコロタイプ版、寫眞網版等を挿入し、以て、興味を喚起せんことを力めたること。

一、固有名詞の讀み方は、文部省の地名人名取調委員の報告に基きたれども、その傍に加へたる原字は、英語を主とし、英語と委員報告の稱呼と、甚しく相違せるものは、その報告に近き國の原語をも加へ、フ(フランス)ド(ドイツ)タ(イタリア)ロ(ロシア)オ(オランダ)ス(イスパニア)ポ(ポルトガル)ギ(ギリシア)ラ(ラテン)等の

符號を用ゐて、これを表はしたること。

一、蘊頭には、見出しを掲げ、また、挿畫の説明文を載せて、本文の補修に充て、別に、欄外に、國史、及び、東洋史上の類似事項を掲げて、以て、時代の觀念を明確にせんことを期したること。

等なり。本書を使用せらるる諸君、幸に、著者苦心の存する所を察したまはらば、豈たゞ、著者の光榮のみに止まらんや。

明治三十九年十一月

著者しるす

本書學習の參考書として、拙著西洋史參照圖畫、箕作著西洋史綱要解、西洋歴史地圖、西洋史講話、和田萬吉氏著世界通史、瀬川秀雄氏著西洋通史、浦井鍠次郎氏著西洋歴史年表等の類を推す。

目次

第一部　上古史

第一篇　西洋文明發生時代……一

第一章　東方諸國の盛衰……一

第二章　東方の統一……五

第三章　ギリシアの勃興……七

第二篇　東西衝突時代……一〇

第一章　パルシアのギリシア侵入……一〇

第二章　アテネの隆盛　ギリシアの文化……一三

第三章　ペロポネソス役　スパルタ・テーベ・マケドニアの興業……一六

第三篇　東西文化融合時代……一九

第一章　アレクサンドル大王の業……一九

第二章　地中海沿岸諸民族の交渉　ローマの興起……二二

第三章　ローマの地中海沿岸征服……二六

第四篇　ローマの大統一時代……三〇
第一章　ローマ共和政治の末路……三〇
第二章　ケーザルの業……三三
第三章　ローマ帝政の隆盛……三六
第四章　ローマ帝政の衰微……三八
第五章　ローマの國情及び文化……四一
上古史摘要……四四

第二部　中古史
第一篇　西ヨーロッパ混亂時代……四八
第一章　種族の大遷移　西ローマの滅亡……四八
第二章　東ローマとペルシアと……五一
第三章　サラセンの勃興……五三
第四章　ギリシア皇帝とローマ法王と……五六
第二篇　政教大統一理想時代……五九
第一章　カロロ大帝の業……五九
第二章　ノルマンの跋扈……六一
第三章　神聖ローマ皇帝とローマ法王と……六四
第四章　サラセンの衰微　十字軍……六八
第五章　イギリス・フランスの發達……七一
第六章　東ヨーロッパの形勢……七五
第七章　中古西ヨーロッパの社會及び制度……七八
第三篇　國家主義發生時代……八二
第一章　法權の衰微　帝權の不振……八二
第二章　各國の中央集權……八六
第三章　兵制及び政略の一變　スウィスの獨立　プス信徒の亂……九〇
第四章　文藝復興　活版術の發明……九三
第五章　地理上の發見　ポルトガル・イスパニアの植民策……九六
第六章　オスマンリ土耳コの勃興……一〇〇
第七章　イタリアの役……一〇四
中古史摘要……一〇七

第三部　近古史
第一篇　イスパニア・フランス對抗時代……一一二

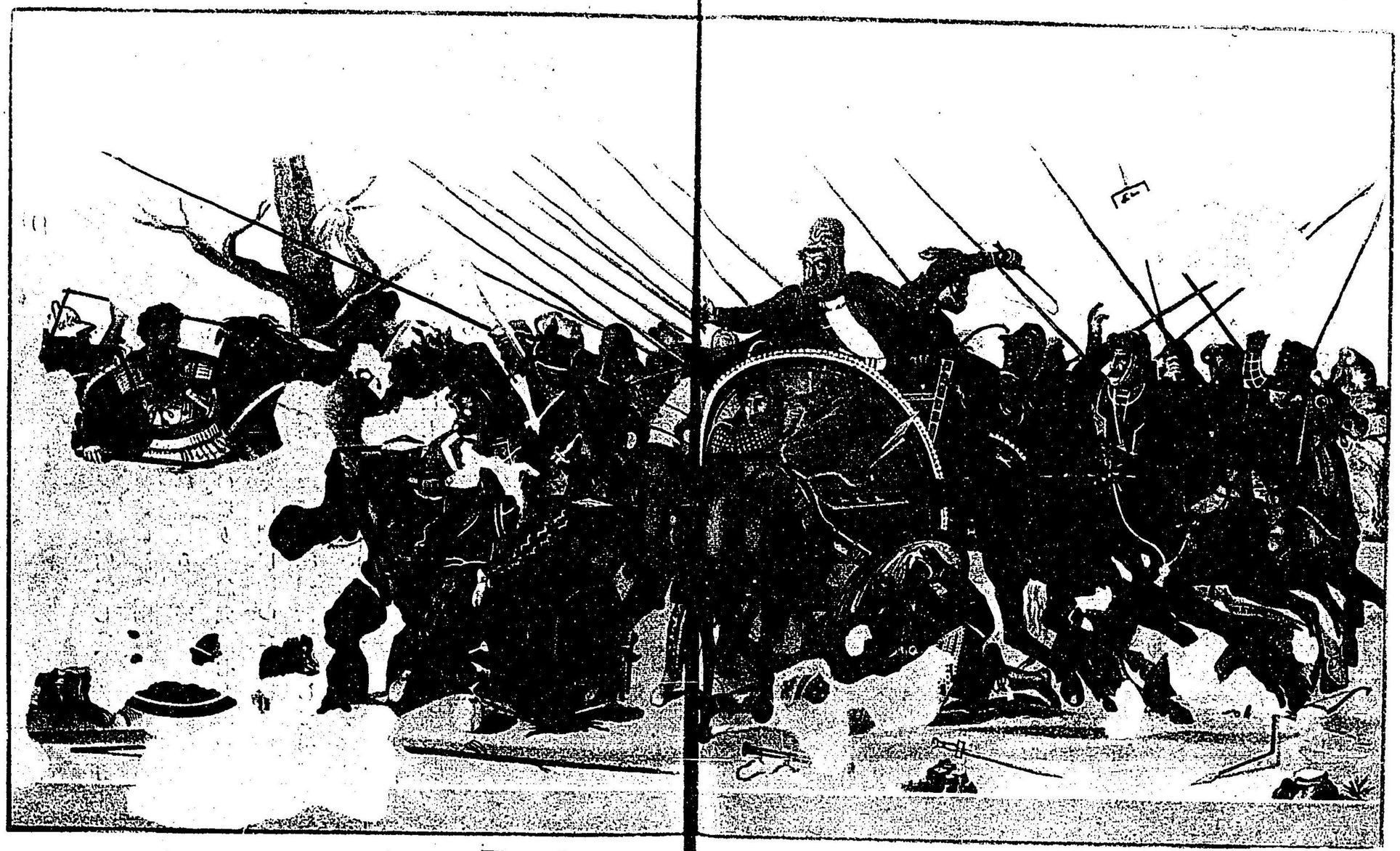
第一章　宗教改革……一一二
第二章　カロロ五世の雄圖　シュマルカルデンの役……一一五
第二篇　イスパニア強大時代……一一九
第一章　宗教改革の反動……一一九
第二章　オランダの獨立及びその隆盛……二一
第三章　イギリスの宗教改革……二四
第四章　フランス宗派の爭……二七
第五章　三十年の役……二九
第三篇　フランス強大時代……一三二
第一章　フランスの内政整頓及びその外國侵略……一三二
第二章　イギリス兩度の革命……一三五
第三章　イスパニア繼承の役……一三九
第四章　スウェーデン・ポーランド・プロシアの盛衰……一四三
第四篇　ロシア・プロシア發展時代……一四六
第一章　北方の役　ポーランド繼承の役……一四六
第二章　オーストリア繼承の役　七年の役……一五〇

第三章　オランダの不振　イギリス・フランス植民政策の衝突……一五四
第四章　ロシアの侵略　ポーランド滅亡……一五八
第五章　第十八世紀に於けるヨーロッパの風潮……一六二
第五篇　革命時代……一六五
第一章　アメリカ合衆國の獨立……一六五
第二章　フランス大革命の原因……一六八
第三章　大革命の進行……一七二
第四章　恐怖政治……一七六
第五章　大革命の末路　對フランス大同盟……一八〇
第六章　ナポレオンの創業……一八五
第七章　ヨーロッパ獨立の役　ウィーン列國會議……一九〇
第八章　フランス大革命時代に於ける各國植民地　太平洋探檢……一九五
近古史摘要……一九八
第四部　最近世史
第一篇　守舊進歩兩主義衝突時代……二〇六
第一章　神聖同盟……二〇六

目次

第二章　アメリカ諸國及びギリシアの獨立……二〇九
第三章　七月革命及びその影響……二一三
第四章　イギリスの改革　イベリア半島の内亂　東方問題……二一七
第二篇　民族的統一成功時代……二二二
第一章　二月革命及びその影響……二二二
第二章　クリムの役　イタリア王國の成立……二二七
第三章　アメリカ合衆國南北の爭　メキシコの亂……二三三
第四章　オーストリア・プロシアの爭鬩……二三七
第五章　ドイツ・イタリア統一完成……二三九
第六章　ロシア・トルコの役……二四六
第七章　第十九世紀に於ける西力の東漸……二四八
第三篇　世界政策維新時代……二五三
第一章　最近事件……二五三
第二章　最近の進歩……二六〇
第三章　世界現時の形勢　日本の位置……二六六

終



アレクサンドル、ダリウス王を追ふ圖

アレクサンドル大王の東征するや、小アジアを席卷して、シリアに向へ。ペルシア王ダリオス三世、大軍を率ゐ、來りてその背後に出で、退路を塞がんとす。大王、乃ち引きかへして、イッス(Issus)に戰ひ、大にこれを破る。時に紀元前三三三年なり。

本圖は、イッス大戰の一部を示したるものなり。紀元前七九年、ベスビオ(Vesuvius)山の噴出するや、ポンペイ(Pompeii)市、また、その噴出物のために埋沒せらる。近年その舊址發掘の事あり、たまたま、市内某家の床に、極彩色を施して、一幅の畫圖の如くせる奇石細工あるを發見したり。本圖は、即ちそれなり。今、ナポリ(Naples)府の國立博物館に藏す。

圖中、戰車に乘れるは、ダリオス王にして、その左の隅にある馬上の勇士は、アレクサンドル大王なり。大王、親ら、ダリオスを追ひ、將に及ばんとせし時、忠義なるペルシアの一貴族が、主の大事を見て取りて、その馬前に立ち塞がり、身を棄てて、アレクサンドルを支へたるを、大王は、ただ一突きに突き殺し、逃げ行くダリオスを、キット睨めたる所なり。

新編西洋史綱

文學博士 箕作元八
峰岸米造 合著

第一部 上古史

第一篇 西洋文明發生時代

第一章 東方諸國の盛衰

文明の曙光

アジアの支那・インド(India)・メソポタミア(Mesopotamia)、アフリカのエジプト(Egypt)、及び、アメリカのメキシコ(Mexico)は、世界中、最もはやく文明の曙光を放ちたる處なり。この中にて、特に世界史に重要の關係を有し、かつ、その歴史の、西洋史の源をなせるは、實に、エジプト、及び、メソポタミア兩地方とす。

エジプトの建國

エジプト王及び王后の神に事ふる圖
タベ神殿の壁畫なり王后の著たるはツスモノなり

エジプトは、氣候炎熱なるが上に、ニール河(Nile)、年年期を定めて溢れ、土壤、これがために肥え、穀物、よくみのり、牧畜にも適せしかば、今より約五千年前に、國を建てより、文明の發展、速かにして、紀元前一三〇〇年頃には、盛大なる王國となれり。

エジプトの文明

エジプト人は、工藝に長じ、その築造せる宏大の金字塔(ピラミド)・神殿等は、今、尙多く殘存せり。象形文字、及び、繪畫・彫刻も、古くより行はれ、數學・天文學等も、やや進み、早く太陽曆の發明あり。また、太陽を最上の神として崇め、靈魂の不滅を信じ、屍體に藥物を施し、ミイラとして、永くこれを保存する風ありき。

バビロニアとアッシリア

メソポタミア地方は、氣候温和にして、エウフラト・チグリス(Euphrates Tigris)兩河、その間を流れ、耕作に適せり。紀元前二三〇〇年頃、

バビロニアとアッシリアとの文明

アッシリアの首實檢の圖浮彫

ヒタ

ヘブライ

バビロニア王國、まづ興り、つぎて、その北西に、アッシリア(Assyria)人、また興り、紀元前第十三世紀頃には、共に盛んなる王國なりき。

バビロニア(Babylonia)人とアッシリア人とは、人種・習俗を同じくし、いづれも、天文・建築・彫刻に長じ、楔形文字を用ゐたりしが、バビロニア人は、わけて刺繍に巧みに、アッシリア人は、特に武を好み、戰を善くせり。

初め、エジプト、及び、メソポタミア地方に、やや文明の進みたる頃、シリア地方に、ヒタ(Hittites(Chita))といふ慓悍なる遊牧の民ありて、メソポタミアを侵し、一時、エジプトをも征服したり。されど、後、遂に逐はれて、シリア(Syria)の北に居りき。

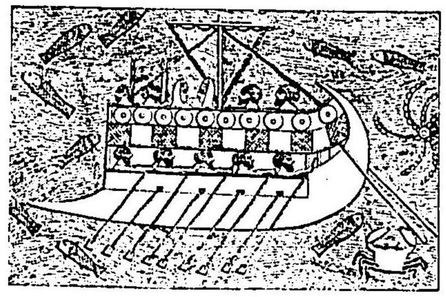
シリアの西南なるパレスチナ(Palestina)には、ヘブライ(Hebrews(Hebrai))といふ民族ありぃあつ一神教を信じて、他の民族と相容れず、高僧を置

きて、神制政治を行へり。紀元前一〇〇〇年頃王政に改め、爾後、ますます富強に赴きしが、約七十年にして、内訌起り、イスラエル・ユダヤ二王國に分裂したり。

ヘブライの西北、地中海の沿岸に、フェニキア（Phenicia）あり。獨立せる市の聯合より成り、その中の一市を推して覇者とせり。紀元前第十世紀の中頃を、その極盛時とし、チル市（Tyre）覇權を握れり。

フェニキア人は、怜悧活潑にして、冒險進取を喜び、商船隊商を派して、海陸の通商貿易を營み、西は太西洋に出で、東はインド南部に至り、處處に植民地を拓き、倉庫を設けて、當時の商權を握り、大に經濟の發達と、智識の傳播とを助けたり。

現今、西洋諸國に行はるる文字は、フェニキア人の發明せる便



フェニキア
フェニキアの軍艦
上部に圓形のものの並びたるは敵の矢を防ぐための柵なり水中に魚鱗等を加へてその水なることを明かにす

利なる音字より出でたるなり。

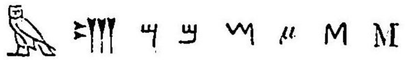
上古諸民族の文字
イ、エジプト
ロ、バビロニア
ハ、フェニキア
ニ、ヘブライ
ホ、最古ギリシア
ヘ、稍後のギリシア（普通）
ト、古ローマ字、今のローマ字

第二章　東方の統一

アッシリアの大統一

アッシリアは、紀元前第九世紀より、勢、大に振ひ、同第七世紀に至りて、バビロニア・エジプト以下、悉く當時の開明地方を一統し、北はカフカス（Caucasus）山脈地方より、南はエジプトの南境に至る大王國となりたり。

齊の桓公の霸業方に盛んなり



イ　ロ　ハ　ニ　ホ　ヘ　ト　チ

されど、アッシリア人は、性質、殘忍酷薄にして、屬國民を愛撫せず、統御の法、宜しきを得ざりしかば、叛亂、つねに絶えざりき。

アッシリアの滅亡

神武天皇の御代

たまたま、スキタイ（Scythians (Skythai)）といふ蠻族、北方より侵入し來り、焚掠を恣にせしかば、國勢、大に衰へ、紀元前六〇六年頃、遂にメディア（Media）とバビロニアとのために滅されぬ。ここに於て、メディア・バビロニア・リディア（Lydia）・エジプトの四王國起りて、相對峙し、各、

春秋時代

四國對立

前年孔子生る

ペルシア勃興

競ひて、國力を伸張せんことを力めたり。

既にして、メヂアの屬地ペルシア(Persia)に、キロス(Cyrus(Kyros ギ))起り、紀元前五五〇年、メヂアを滅し、つぎて、リヂア・バビロニアを從へ、更に當時の開明諸國の公敵なるスキタイを伐ちて戰死せり。

ペルシアの大統一

キロスの子カンビセス(Cambyses)の時、エジプトをも併せたるが、紀元前五二二年、その死するや、國内、大に亂れたり。王族ダリオス(Darius)、これを定めて、位に即き、益、兵を用ゐて、四方を略し、東はインド河(Indus)より、西はドナウ河(Danube(Donau ド))下流の地に及び、北はヤクサルト(Jaxartes)河より、南はエジプトの南境に至る空前の大國をなしぬ。

ダリオスの内政

ダリオスは、王權を強大にし、その大版圖を二十縣に分ち、各縣にペルシア貴族の知事を置きて、行政・司法、及び、收稅を總理せしめ、屬僚以下には、專ら地方の人士を登用し、別に將軍を置きて、兵事を管し、目付役を設けて、官吏の行爲を監督

ダリオス王

上にあるはペルシア正神の長アフラマズダなり王の後にあるは從者にて一人は傘をさしかけ一人は拂子にて蠅などを拂ふ古ペルシアの浮彫なり

ペルシア人の性質

ギリシア人の勃興

することとせり。王は、また、常備軍を置き、軍路を開き、驛傳を設け、運河を通じ、農商の業を奬勵し、特に、新附の諸民族を遇するに寛大なりしかば、域内、善く治まり、國運、隆盛を極めて、有史以來の堅固なる大統一國を成せり。

ペルシア人は、その性、寛仁にして、度量ひろく、統一を喜び、潔白を重んじ、虚僞を排し、忠君の美德を有したり。蓋し、その信奉せるゼラツストラ(Zoroaster(Zarathustra))教の感化、與りて力ありといふ。

第三章　ギリシアの勃興

東方に於て、四國對立の形勢を呈せる時に當り、ヨーロッパの東南部に位せる半島に、一種優等なる國民勃興し、遂にペ

ルシアと相爭ふに至れり。これ即ちギリシア人なり。

ギリシアは、港灣に富み、海上交通の便多く、氣候温和にして、風土秀美なり。域内、山脈、縱横に亘りて、數多の小地方に分れ、地方ごとに、はやく、獨立の市、發達して、各〻一國を成せり。

ギリシアの地勢風土

その南部に起れるスパルタ(Sparta)市は、純然たる貴族政體にして、大事は、貴族より成れる市民會にて決し、上に、二人の王を戴けども、實權は、年年、選ばるる五人の監督官(Ephor)の手に在りき。

スパルタの貴族政治

スパルタは、内、平民を壓し、外、國威を振はんと欲し、憲法により、七歳以上の市民、即ち貴族の男兒には、政府、自らこれに嚴格なる武士教育を授け、體格を強健にし、精神を勇壯にし、武術に熟達し、困苦闘乏に堪へしめ、儉素・剛毅・廉潔・義勇・奉公の德を養成し、長じては、一定の市民團體に屬して、共同の粗食をなし、團員をして、死生相援けしむ。女子教育も、體育を

スパルタの教育

重んじ、婦德を磨くことを旨とせり。

この教育の効果、大に顯はれて、スパルタは、日に強盛に赴き、紀元前第六世紀の中頃、ペロポネソス(Peloponnesus)半島の覇權を握り、進みて、中部ギリシアに、その手を伸ばさんとせしが、其處には、既に、これと相對すべき實力を有するアテネ(Athens)市ありたり。

スパルタの強盛

ギリシアの歩兵(ギリシア古瓶の畫)
甲冑を着、左手に槍と圓き楯とを持つ戰ふ時は楯を左に、槍を右に持ちて突くなり或は二三本の槍を握りて投げつくることあり

アテネは、初め王政なりしが、後、これを廢して、在職一年の執政官(アルコン Archon)九人を置けり。されど、貴族、政を專らにして、平民を虐げ、軋轢、久しく絶えざりき。紀元前五九四年、執政官ソロン(Solon)、憲法を立てて、平民にも參政權を與へしより、民權、大に伸びて、遂に民主政治定まり、中部ギリシアに雄視し、なほ、東方の海上にまで、その力を張るに至れり。

アテネの發達

スパルタ人は、剛毅・粗朴にして、沈默・清貧を尚び、保守・貴族

神武天皇の晩年

アテネ人との性情の相違

主義を守り、アテネ人は、優雅・向上の精神に富み、學問・美術を愛し、貨殖・辯論を重んじ、進歩・平民主義を尚べり。

第二篇　東西衝突時代

第一章　ペルシアのギリシア侵入

衝突の遠因

ギリシア人は、その性質・主義、ペルシア人と反對にして、自由を愛し、人に膝を屈するをいさぎよしとせず、聯合共存の念薄く、孤立分守の氣性勝てり。　されば、そのペルシアと境を接するに及び、これと衝突の起るは、免れ難き勢なりき。

衝突の近因

さきに、小アジア地方(Asia Minor)が、ペルシアの版圖に入りし時、その海岸にあるギリシアの植民地も、ともに併せられたりしが、紀元前五〇〇年、ペルシアに叛きて獨立せんと企つるや、アテネ等、その求めに應じ、軍艦を遣りて、これを援けたり。　ダリオス王は、忽ち、この叛亂を鎮定し、さらに、ギリシア本國を懲して、その主權を蔑如したる罪を問ふことに決しぬ。

孔子の死に先だつ一年

第一次のギリシア征討軍は、紀元前四九二年に發遣せられしが、暴風に遭ひて、空しく歸國せり。　後、二年、第二次征討軍、中部ギリシアに迫り、かへりて、アテネの名將ミルチアデス(Miltiades)のために、マラトン(Marathon)に破られたり。　この戰捷の後、アテネは、テミストクレス(Themistocles)の獻策を容れ、海軍を擴張して、敵の再擧に備へき。

吳越の爭も亦この頃

紀元前四八〇年、ダリオスの子クセルクセス(Xerxes)王、親しく大軍を率ゐて、またギリシアに攻め入りぬ。　ギリシア人は、同盟を結び、スパルタを盟主として、これに當り、その王レオニダス、テルモピレ(Thermopylæ)を扼して、奮戰し、部下と共に皆死せり。　ペルシア軍、乃ち進みて、アテネを焚きたり。

ダリオスの失敗

クセルクセスの侵入

テルモピレの奮戰

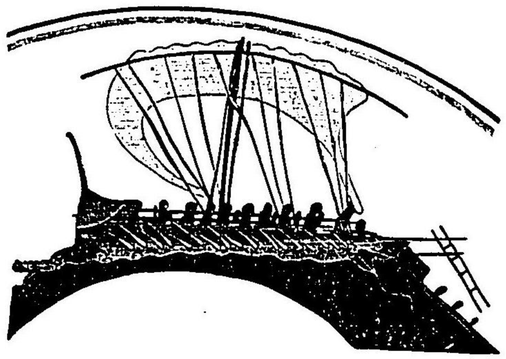
サラミスの海戰

アテネ人は、豫め、みな船に乘りしが、列邦の海軍とともに、ペルシアの艦隊を、サラミス(Salamis)灣に邀へ擊ち、大にこれを破りぬ。翌四七九年、ギリシア聯合軍は、プラテーエー(Plateæ)の陸戰に、また、大勝を得て、全く敵を擊攘し、さらに、海軍を進めて、敵の艦隊を、小アジアの海岸に粉碎せり。つぎて、アテネを盟主とせるデロス(Delos)同盟成りて、ペル・シアは、ますます苦められしかば、遂に屈して、和を講じ、國勢、また振はずなりぬ。

デロス同盟

カルタゴ●ギリシア植民の衝突

サラミス海戰の當時、シチリア(Sicilia ラテン)島なるギリシア植民諸市の軍は、シラクサイ(Syracuse(Syrakusai ギ))市の主ゲロン(Gelon)に率ゐられ、大にカルタゴ(Carthage(Carthago ラ))人を、ヒメラ(Himera)に破れり。カルタゴは、フェニキアの植民地にして、アフリカ北岸形勝の地を占め、はやくより繁昌し、本國の衰ふるや、ますます、富み榮えて、シチリア・サルヂニア(Sardinia)・マルタ(Malta)、及び、イスパニア(Spain(España ス))の海岸等に植民地を有したり。ギリシア人も、また、東西に植民地を設け、東は小アジア、及び、黑海沿岸に、西はイタリア(Italia ラ)南部・シチリア・サルヂニア・コルシカ(Corsica)、及び、今のフランス(France)の東南岸・イスパニアの東北岸等に及べり。されば、この兩民族の間には、常に激しき競爭衝突ありたりしなり。



ギリシアの船　古ギリシアの瓶の外面の陰畫、紀元前五〇〇年頃のもの

第二章　アテネの隆盛　ギリシアの文化

ペリクレス時代

ペルシア人の擊退に偉功ありたるアテネは、役後、勢威、大に加はりぬ。特に、紀元前第五世紀の後半には、高潔・明敏の大政治家ペリクレス(Pericles)、民望を負ひて、政を執り、いよいよ、民主主義を擴張し、學藝を奬勵せしかば、アテネの隆盛、この時に

ペリクレス肖像
ギリシアの彫刻、その戴けるは兜なり

西洋文明の淵源

極まり、文物、燦然として輝けり。

ギリシアは、氣候温和、山水明媚にして、人民、また、快活・優雅なればその文明は、はやく、フェニキア・エジプトの感化を受け、やがて、特殊の發達をなして、遙かに他の諸民族を凌駕し、現今の西洋文明の淵源となれり。

この文化は、ペリクレス時代を中心として、その精華をアテネにあつめたり。

ギリシアの學藝

ギリシア語は、その民族の性質に應じて、流麗暢達なり。文學は、はやくより發達し、詩聖ホメロス(Homer(Homeros ギ))の作と稱する大篇は、その感化、多大にして、大に少年の精神教育に力ありき。

その後、エスキロス・ソフォクレス・エウリピデス(Aeschylus, Sophocles, Euripides)等の大家ありて、高健なる劇詩、大に行はれ、また、ヘロドトス・ツキデデス(Herodotus, Thucydides)等

プラトン、アリストテレスは孟子と時を同じくす

の史家、あらはれて、史學、ここに起り、ソクラテス・プラトン・アリストテレス(Socrates, Plato, Aristoteles(Aristotelēs ギ))等、相つぎて出で、哲學・理學の基を開きたり。

この外、建築家イクチノス(Ictinus)、彫刻家フィディアス(Phidias)は、各、高尚雄偉なる千古の傑作を出しき。

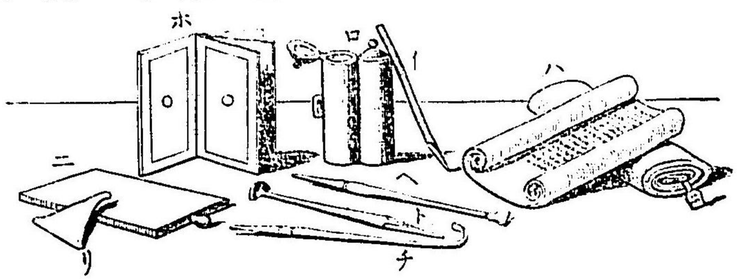
ギリシアの宗教

ギリシアの宗教は、自然崇拜の多神教にして、最上の神をゼウス(Zeus)といふ。その祠、オリンピア(Olympia)にありて、四年ごとに、大祭を行ふ。この時、四方のギリシア諸市は、選手を出して、文藝武技を鬪はし、これに勝を得るを、無上の光榮とせり。

また、デルフォイ(Delphi(Delphoi ギ))には、アポロ(Apollo)神を祭り、同盟を結びて、これに奉仕し、あつく、その神託を信ぜり。

この同盟と、かのオリンピア大祭

ギリシア、ローマ文房具(實物寫生)
イ、筆　ロ、墨汁壺　ハ、革製紙、ニ、蠟を塗りたる板　ヘ、ト、チ、上の蠟板に書く牙筆



とは、ギリシア人の團結を固くするに力ありき。

第三章　ペロポネソス役　スパルタ・テーベ・マケドニアの覇業

ペロポネソス役の原因

スパルタとアテネとは、民情・主義、全く相反せる上に、いづれも、覇氣、盛んにして、實力、また、相伯仲しければ、その衝突は、到底、避くること能はず、紀元前四三一年、戰、つひに開かれぬ。

ギリシアの諸邦、或はアテネを援け、或はスパルタに黨し、相爭ふこと、前後二十七年に及べり。これをペロポネソス役 Peloponnesian War といふ。

ギリシア婦人の奏樂　ギリシア古瓶の畫

支那にては將に戰國時代に入らんとす

ペリクレスの妙策

ペリクレスは、まづ、スパルタ軍を、アテネ城下に誘致し、別に艦隊を派して、その虛を衝かしむる妙策を立てぬ。然るに、アテネに惡疫流行し、ペリクレス以下諸名士、多く斃れて、民情、頗る輕浮に流れ、賤民、多數を制して、跋扈し、施設、甚だ宜しきを得ざりき。

シラクサイ遠征

紀元前四二一年、アテネは、スパルタと休戰條約を結びたるが、民力を休養して、後日の雄飛に備ふることをなさず、シチリアのシラクサイに對して、無謀の遠征をなし、海陸の大軍を失へり。スパルタ等、これに乘じ、ペルシアに軍資を仰ぎて、アテネを攻め、紀元前四〇四年、遂にこれを降しぬ。

アテネ降伏

ペルシアとの關係

かくて、ギリシアの覇權を握れるスパルタは、やがて、ペルシアを侵せり。ペルシアは、他の列邦を煽動して、スパルタと戰はしめしが、紀元前三八七年、和約成りたり。

テーベの覇

その後、スパルタは、勢を貪ひ、頗る他邦を壓せしかば、テーベ Thebes

兵家英起の死後十年

蘇秦張儀と同時

マケドニアの興起

デモステネス肖像

古ギリシア彫刻

べの名士エパミノンダス等、まづ起ちて、内政を改革し、紀元前三七一年、スパルタの大軍を、レウクトラに粉碎し、つぎて、同盟諸市の兵と共に、ペロポネソスに攻め入り、大にその勢力を挫きぬ。既にして、テーベも、また振はずなりて、各邦の勢力平均し、皆ともに疲弊したり。

この時、北隣なるマケドニアの英主フィリポス、盛んにギリシアの文化を移し、また、大に兵力を養ひ、巧みにギリシアの内事に干渉して、その志を逞くせんとせり。アテネの雄辯家デモステネス、フィリポスの野心を看破し、ペルシアの勢援を得、列國大同盟を組織して、これに當りぬ。紀元前三三八年、フィリポスは、同盟軍を

ケーロネアの戰

ギリシアとペルシアとの關係

アレクサンドル大王

ケーロネアに破り、遂に列邦の覇權を握り、更にギリシアのために、ペルシアに對する復仇戰を起し、以て、自己の勢力を確立せんとせしが、發するに先ち、刺客のために殺されたり。

ギリシアの發展は、アジアとの交渉に負ふ所多し。その隆盛は、ペルシア入寇の刺戟に基き、その覇權の爭は、ペルシアに對する復仇の希望に關係せり。故に、ペルシアは、常に列邦を離間し、内訌を起さしめんとしたりしなり。

第三篇　東西文化融合時代

第一章　アレクサンドル大王の業

フィリポス死するや、ギリシア諸邦は、皆マケドニアに叛きて、獨立せんとせしが、嗣王アレクサンドル、雄材大略ありて、忽ちこれを服したり。

アレクサンドルの遠征

アレクサンドル肖像 ギリシア彫刻

アレクサンドルの東西文化融合の計劃

アレクサンドルは、父の志をつぎ、紀元前三三四年、親しく將となりて、ペルシア遠征の途に上り、まづ、小アジアを定め、進みて、フェニキア・パレスチナを席卷し、更に、エジプトを平げて、その地に、アレクサンドリア(Alexandria)府を建設し、再び東方に轉じて、ペルシア王ダリオス三世の軍を、アルベラに粉碎して、ペルシアの全土を併せ、また、インドを侵し、その西北部を略せり。

アレクサンドルは、遂に、東西の文化を融合して、統一せる大帝國を建てんと欲し、その軍隊に、ペルシア人を加へ、ペルシア貴族の少年に、ギリシアの武藝を教へ、ペルシア朝廷の儀式を採りて、王者の尊嚴を示し、自らペルシア王の繼承者に擬して、その王女を娶り、部下の將卒をして、アジアの婦人と婚せしめ、諸種の宗教の融合を企て、また、盛んに、ギリシアの學問・技藝を東方に輸入し、交通・商業の便を開き、以て、その理想を貫かんとせしが、紀元前三二三年、業半にして死せり。

アレクサンドル死後の形勢

アレクサンドルの死後、その雄圖を繼ぐべき英雄なく、國内、紛爭を極めて、領土、遂に分裂し、シリア・エジプト・マケドニアの三王國、最も盛んなりき。

エジプト

シリア・エジプト兩國に於ては、東西の文化、最もよく融合せり。エジプトは、特に多くギリシア文明の感化を受け、都アレクサンドリアは、一時、學藝・商業の中心となれり。

シリア

シリアは、西アジア一圓を領せしが、紀元前第三世紀の中頃に至り、カスピ海の東南に、パルチア(Parthia)(安息)國、獨立し、その東隣に、バクトリア(Bactria)(大夏)國、また獨立したり。バクトリアは、ギリシアの文化を襲用したれど、パルチアは、舊ペルシアの文

化を復興・擴張することを力め、後、遂にバクトリアを滅したりき。

マケドニア

マケドニアは、フィリポスの時には、ギリシア各邦の獨立を犯さず、單に覇權を握るに止めたりしに、その後、動もすれば、列邦を壓迫せんとし、列邦も、また、同盟を組織して、これに抗し、はては、雙方ともに疲弊したり。

第二章　地中海沿岸諸民族の交渉　ローマの興起

西方の形勢

東方に於ては、東西の文化が、ほぼ、融和の途を得たるに、西方に於ては、ギリシア人とカルタゴ人と、なほ、ひき續き衝突し、ローマ人によりて代表せられたるイタリア民族、また、新にこの爭に加はり、つひに、他の兩民族を服したり。

カルタゴの勢

カルタゴは、ヒメラの大敗後、勢、一時、シチリアに振はざりき。然るに、シラクサイが、アテネの遠征軍を破るに及び、アテネに黨したる同島内の諸市、相共にカルタゴに賴りて、自全を計りければ、その勢力、また張れり。

カルタゴの政體

カルタゴの政體は、共和制にして、二人の統領あれども、實權は、閥族より成れる元老院にありき。紀元前第三世紀の初め頃、カルタゴは、富强を極め、强大なる海軍を備へて、地中海の中部と西部とを制し、特にシチリア島のギリシア人を壓せしかば、シラクサイも、勢、窮まり、援をエピロス王ピロス(Pyrrhus)に求めたり。ピロスは、當時、イタリアにありて、ローマと交戰中なりき。

ローマ人禮服(トーガ)着用圖帝政時代の彫刻

ローマの建國及びその政體

ローマ人は、イタリア民族に屬し、チベル河(Tiber)畔の一小市より起れり。

貴庶兩族の爭

その政體は、初め、王政なりしが、後、共和制となり、年年、二人の統領(コンスル Consul)を選びて、行政の首長とせり。然れども、その頃より、國政の大本は、元老院(セナツス Senatus)に移りたり。

ローマにては、貴族、久しく政權を專らにして、庶民を虐げしかば、庶民、服せず、參政權を求めて、しばしば抗爭し、遂に護民官(トリブニ Tribuni)を設け、また民會を起して、その權利を保護增進し、紀元前第四世紀の末には、法律上、全く對等となれり。

この頃桑中原を侵す

ガリ南下の扼止

ローマは、建國以來、次第に四隣を從へたりしが、ガリア、即ち今のフランス地方より、北イタリアに來住せるガリ族(Gaul(Gallia ラ)、Gauls(Galli ラ))、紀元前三九〇年、南侵し來り、都城は、ために焚掠せられき。爾後、ローマは、數回の激戰を重ねて、遂にこれを破りければ、ガリの一部は、東進して、マケドニア・ギリシア等を侵し、小アジアまで渡りて、そこに留まり、ギリシアの文化に浴したり。

ギリシア人との衝突

この頃孟嘗君・田單・廉頗・藺相如等あり

ローマ・カルタゴ同盟

その後、ローマは、ますます、侵略の歩を進め、遂に、イタリア南部のギリシア植民諸市に及べり。エピロス王ピロス、この植民市の一なるタレンツム(Tarentum)の請により、紀元前二八〇年、來りて、連りにローマ軍を破りしが、ローマは、これに屈せずして、不利益なる條件の下に、和することを肯んぜざりき。

やがて、ピロスは、シラクサイの求めに應じ、シチリアに渡りて、カルタゴ軍を破りぬ。ローマ、乃ち、カルタゴと同盟して、ピロスに當ることとし、その再びイタリアに歸り來るや、紀元前二七五年、大にこれに勝ち、ピロスをして、空しく歸國せしめたり。ここに於て、ローマは、タレンツム以下を收めて、殆んど、全くイタリア半島を領有し、要地に民を移して、植民市を起し、その間に軍道を開きて、聯絡を通ぜり。

ローマ・カルタゴ衝突

第一ポエニ役

縣の始め

ローマの膨脹

第三章　ローマの地中海沿岸征服

ローマは、イタリアに、その勢威を張り、さらに進みて、地中海を制せんとせしかば、ここにカルタゴと兩立し難く、紀元前二六四年、遂に戰を開けり。これを第一ポエニ役とす。Punic War

ポエニとは、ローマ人が、フェニキア民族を呼べる稱なり。Poeni

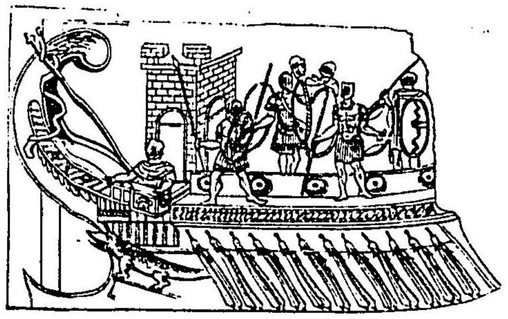
カルタゴは、財政鞏固にして、海軍、また、甚だ強かりしかば、精鋭なる陸軍を有するローマも、容易に、これに勝つこと能はざりき。されど、ローマは、擧國一致して、敵に當り、辛苦して新艦隊を建設し、紀元前二四一年、海戰によりて、最後の勝利を收め、つひに、カルタゴをして、シチリア島を割きて和せしめ、始めて、縣をその地に置きたり。

つぎて、ローマは、カルタゴの内亂に乘じて、サルヂニアを割讓せしめ、北方のガリをも討平せり。カルタゴも、また、イ

カルタゴの新經營

ローマの軍艦浮彫。前面にあるは塔にて一艦に二乃至四あり、兵士この内より亂射す

第二ポエニ役



スパニアを征服し、その銀山の利を收めて、國力を養ひ、土人を傭兵とし、必ずローマに報いんとして止まざりしかば、紀元前二一八年、第二ポエニ役は開かれたり。

當時、海上は、ローマのために制せられしかば、カルタゴの名將ハンニバルは、イスパニアより、陸路、アルプスの嶮を越えて、イタリアを侵し、連りに、ローマの軍を破れり。中にも、カンネーの大勝は、殆んど、ローマの國運を危からしめたり。Cannæ

されど、ローマ國民、よく心を一にして、これに當り、植民諸市、また、忠實なりしかば、終局の勝敗は、未だ容易に定まらざりき。

既にして、ローマの勇將スキピオ、軍を提げて、カルタゴの

漢楚の分爭亦この頃なり

ザマの戰

ザマの戰と項羽の沒落と同年

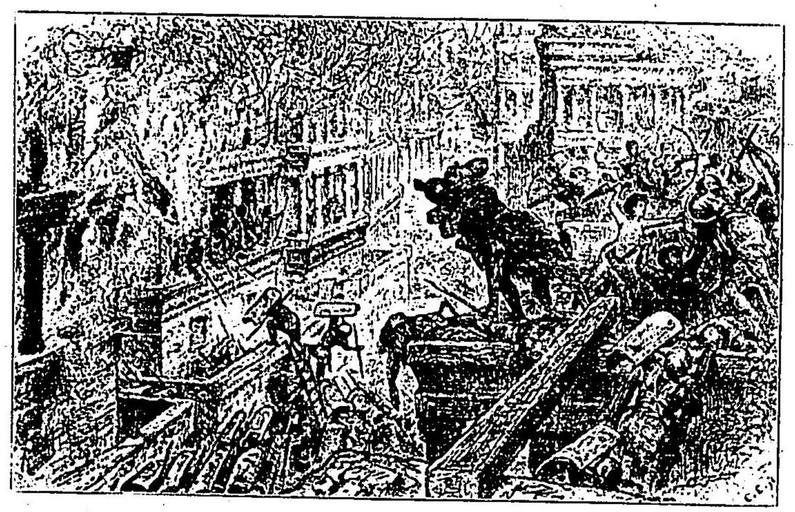
カルタゴ請和

カルタゴ市陷落の圖

市街戰の狀況を示す

第三ポエニ役

本國を衝けり。ハンニバル、急に歸り援ひ、これとザマに戰ひて、大敗したり。ここに於て、カルタゴ、和を請ひ、イスパニアを割讓し、償金を出し、ローマの許可なくして、兵を動かさざることを約しぬ。時に紀元前二〇一年なり。



カルタゴは、もと形勝の地を占め、その民、また有爲活潑なりしかば、ほどなく、再び隆盛に赴かんとせり。ローマは、その遂に後患をなさんことを憂ひ、紀元前一四九年、激して戰を開かしめ、攻圍三年にして、全くこれを滅し、その地を併せたり。これを第三ポエニ役とす。

東方經略

この頃漢武帝類りに匈奴を擊つ

ローマの大版圖

これよりさき、第二ポエニ役の後、ローマは、直に東方の經略を始め、マケドニアをうち破りて、ギリシアの覇權を棄てしめ、かつ、ローマの許可を得ずして、みだりに、兵を動かさざることを約せしめ、また、シリア王國を攻めて、その西邊の地を奪ひ、つぎて、カルタゴ滅亡の年には、マケドニア王國を滅し、ギリシアをも征服し、後、益〻領土を東西に擴めたり。されば、紀元前一三三年頃には、ローマの版圖は、東の方小アジアより、西はイスパニアに達し、南、カルタゴの故地に及び、地中海は、殆んどローマの湖の如くなれり。

第四篇　ローマの大統一時代

第一章　ローマ共和政治の末路

ローマの風紀頽廢

ローマの、諸外國を征服するや、天下の富、ローマに集まり、ギリシアの文化も、盛んに行はれしが、同時に、奢侈・遊惰・輕躁・浮薄の俗、また輸入せられ、勤儉・尚武の美風、大に衰へたり。

閥族の驕横

さきに、貴族・庶民の平等となりたる後、新に閥族を生じ、元老院議員席、及び、高等官職を獨占せしが、今や、民間の事業家と結托し、私利を營み、驕横を極め、土地を兼併し、奴隸を用ゐたれば、平民は、業を失ひて困窮し、自ら輕躁・浮薄に流れ、健全なる中等社會消滅して、上下貧富の懸隔、日に加はりぬ。

ローマ婦人描畫の圖　ポムペイの遺址なる壁畫の一部

グラックス兄弟

グラックス兄弟、この時に出で、兄チベリウスは、紀元前一三三年、護民官となり、土地所有額制限の法を厲行せんとし、反りて、閥族のために、殺されたり。弟カイウスは、紀元前一二三年、護民官となり、兄の志を繼ぎ、平民を救ひ、かつ、ローマ以外のイタリア民族に、市民權を分たんとし、また、成らずして死したり。

内外の事情

グラックス兄弟の死後、閥族の跋扈、いよいよ甚しく、施政、ますます、宜しきを得ざりしかば、戰役續發し、ヌミヂア遠征、北狄ゲルマニの入寇、及び、他のイタリア民族の離畔等の事あり。

マリウス及びスルラ

かかる内外多事の間に、マリウス・スルラ二人出て、各、武功をたてて、互に權を爭ひ、マリウスは、平民に黨し、スルラは、閥族を援け、始めて、兵力を黨爭に用ゐ、反對黨の人を虐殺し、或はその財産を沒收するに至れり。

兵士の墮落

蓋し、この頃の兵士は、無智の賤民にして、久しく兵役に服し、國家を思ふの念、薄

崇神天皇の御代、四道將軍の發遣も亦この頃

ミトラダテス事件

閥族黨の勝利

ローマ共和政治の末路

く、その服從せる大將の頤使に從ひて、盲動するに過ぎざりしなり。當時、ローマの半屬國なるポントスの王ミトラダテス(Mithradates)、叛きて、その隣邦を蠶食し、小アジアを席卷し、ギリシアを窺ひ、勢、頗る強大なりき。スルラ、マリウスに勝ち、反對黨を嚴罰して、閥族の勢力を固め、然る後、東伐して、ミトラダテスを破り、侵地を還さしめて、急に凱旋せり。

スルラの不在中、マリウス、虛に乘じて、ローマを取り、スルラの黨を殘殺したり。既にして、スルラ、ローマに歸るに及び、また、反對黨を殺戮し、自ら總統(ディクタートル Dictator)となり、大に民會を抑へ、元老院の權を張れり。總統とは、國家危急の時、選ばれて、暫時、兵政の全權を托せらるる官職なり。紀元前七八年、スルラ死するや、元老院は、また、無能の舊態に陷りて、恒産なき貧民を御する能はず、國政荒廢しければ、內憂・外患、交〻至れり。

後敬年新羅建國

ポンペイウス及びクラッスの功

第一三頭政治

紀元前七二年、ポンペイウス(Pompeius)、マリウスの殘黨をイスパニアに平げ、クラッス(Crassus)、奴隸の亂を鎭壓したり。つぎて、ポンペイウスは、當時、地中海に跋扈せる海賊を掃蕩して、ローマの糧道を安全にし、また、ポントスを討ち滅し、シリア地方を屬地となし、紀元前六二年、凱旋せり。

第二章　ケーザルの業

ローマの共和政治、既に全く腐敗し、閥族、專橫を極め、地方人民は、聚斂に苦めり。平民黨の首領ユリウスケーザル(Caius Julius Cæsar)は、千古稀なる人傑にして、はやくも、時勢を洞察し、ポンペイウスが、その東方に於ける處置を認められざるを怒りて、元老院を怨めるを見、乃ち、これと結び、また、クラッスを引き、紀元前六〇年、第一三頭政治を作り、元老院の政權を奪へり。

ケーザルのガリア平定

クラッスのパルチア征伐

パルチア・ローマの關係

ポンペイウスとケーザルとの爭

つぎて、ケーザルは、ガリアの縣令となりて、その地に赴き、前後八年を費して、悉く慓悍なる土民を服し、附近のゲルマニアをも破り、また、ブリタニア(Britannia)を伐ちて、ローマの文化を西方に傳播せり。クラッスは、シリア縣令となりしが、パルチア征伐を企てて敗死し、ローマの東方に於ける勢威を失墜したり。パルチアは、さきに、ポンペイウスが、ポントスの與國アルメニア(Armenia)を討てる時、これと同盟したりしが、後、その盟約を履行せざるを怒り、爾來、ローマの仇敵たりき。

ポンペイウスは、ひとり、ローマに留まり、ケーザルの威名を忌み、再び閥族と結びて、これを除かんとせしが、ケーザルが、兵を率ゐて、歸り來るに及び、多數の閥族とともに、ギリシアに出奔したり。ケーザル、これを追ひ、紀元前四八年、ファルサルス(Pharsalus)に勝ち、北ぐるを追ひて、エジプトに至りしに、ポンペ

崇神天皇の御代

ケーザルの君主的支配

ケーザル肖像 ローマ彫刻

イムペラトル

イウスは、既に土人に殺されたりき。乃ち、東西各地にあるその餘類を平げ、紀元前四五年、ローマに凱旋せり。

かくて、ケーザルの威、中外に振ひ、終身の總統に擧げられ、イムペラトル(Imperator)の稱號を得て、文武の大權を握り、大に人材を登用し、兵制を改め、海軍を擴張し、刑法を改良し、財政を整理し、植民市を新設し、地方の行政を刷新し、曆法を改め、實業・學藝を勵まし、治績、大に顯はれたり。しかるに、その榮達を嫉めるカシウス(Cassius)等、及び、共和政治の顚覆を憂ふるブルツス(Brutus)の輩、密に黨を結び、紀元前四四年、遂にケーザルを政廳に刺し殺せり。イムペラトルとは、將軍の義にして、本邦の征夷大將軍に相當し、後に、皇帝と同意義となれり。

第三章　ローマ帝政の隆盛

第二三頭政治

ケーザルの死後、アントニウスといふもの、ケーザルの養子オクタウィアヌス(Octavianus)、及び、部將レピヴス(Marcus Antonius Lepidus)と結び、紀元前四三年、第二三頭政治を立て、各その政敵を倒し、また、ブルツス・カシウス等を、フィリピ(Philippi)に破りて、これを殺せり。

天下一統

ほどなく、アントニウスは、パルチアを伐ちて敗れ、エジプトに至りて、その女王クレオパトラ(Cleopatra)と結び、オクタウィアヌスと隙を生じたり。オクタウィアヌス、これを攻め、紀元前三一年、アクチウム(Actium)に勝ち、翌年、エジプトを滅して、ローマの縣とせり。これよりさき、レピヴスは、既にオクタウィアヌスに屈せしかば、天下、ここに一統したり。

前年任那始めてわれに入貢す

帝政の始め

オクタウィアヌスは、イムペラトルとなり、威嚴高大の義な

アウグスツス立像寫眞

本圖に示せるは、一八六三年、ローマ市附近なるアウグスツスの皇后リビア(Livia)の別莊舊址より掘り出したる大理石像にして、頗る美なるものなり。その胸の邊に赤き彩色の迹の見ゆるは、石像にも、古くは、彩色を加へたることあるを證するに足る。本像は、今、ローマのバチカノ(Vatican)宮殿(法王の宮殿なり)附屬の博物館に藏す。

下着の上に着けたる鐵製の鎧には、浮模樣あり。上着をば、腰の邊まで脱ぎ、その一部を左の手にかけたり。左手には、その地位の表章たる棒を持ち、右の手を高くあげて、今や、命令を下しつつあるものの如し。

眞實ノ如ク立ヘタ

王葬偕稱時代

帝政の極盛

アウグスツスの內治

アウグスツスの外政

るアウグスツス(Augustus)といふ尊號を得て、共和政治の要職を、一身に兼ね、君主の實權を握るに至れり。これより後を、ローマ帝政の時代と稱す。

アウグスツス、意を內治に用ゐ、風俗の改良を計り、地方の政治を改め、ローマの市街を改良修築し、大に文學・美術を奬勵せしかば、ウィルギリウス・ホラチウス(Horace(Horatius ラ))・オウィディウス(Ovid(Ovidius ラ))等の詩人(Virgil(Virgilius ラ))出でて、ローマ文化の黃金時代を成せり。

アウグスツスは、パルチアと和して、エウフラト河を界とし、また、ゲルマニ人を伐ちて、ライン河(Rhein ド)右岸の地を侵略し、國境に、多くの城砦を設け、蠻族の侵入に備へたり。

紀元一四年、アウグスツス死し、その家に多少の緣故あるもの、數世、相つぎて立ち、帝政、漸く固定せり。その後、フラウィウス(Flavius)家の三帝を經て、賢明なる五帝出で、帝國の盛榮、その極

日本武尊東夷征伐

に達したり。就中、トラヤヌス(Trajan(Trajanus))九八・一一七は、ダキア(Dacia)を征服して、これを縣とし、アラビア(Arabia)北部を取りて、アラビア縣を置き、また、大舉して、パルチアを伐ち、ペルシアに達し、版圖の最大擴張を致せり。

前二十六年神功皇后征韓の役

帝政の衰微

中期ペルシアの興起

支那にては諸葛孔明の頃

第四章　ローマ帝政の衰微

紀元第二世紀の末より、およそ百年の間、ローマには、良君なく、軍隊跋扈して、恣に皇帝を廢立せしかば、國内、漸く亂れて、産業振はず、人民、大に苦めり。

この頃、ペルシアの故地に、アルタクシル(Artakshir)といふもの起り、二二六年、パルチアを滅して、ササン(Sassanidæ)朝のペルシアを興し、大に國勢を張れり。

かく、ローマの東境、漸く多事となれるに當り、北方には、ゲ

ゲルマニの侵入、軍隊の跋扈

ローマ兵攻撃準備の姿勢（カタプルタ（射矢機））

翌年王仁始めて論語を本邦に輸入す

前四年晋天下を一統す

ディオクレチアヌスの業、

コンスタンチヌスの業

ルマニの諸種族、しきりに亂入して、劫掠を恣にし、各地の軍隊は、また、各、その將を推して帝としければ、ローマ帝國も、四分五裂の有樣となりぬ。

二八四年、ディオクレチアヌス(Diocletianus)帝、内亂を平定して、位に登り、大に紀綱を張りて、君主專制を完備し、また、各地の行政を周到ならしめんとして、帝國を四分し、自らニコメディア(Nicomedia)に都して、東部を直轄し、かつ、總理となりて、時時、諸分國主と、帝國一般に關する事を協議せり。

ディオクレチアヌスの死後、紛爭、また起りしが、三二三年、コンスタンチヌス(Constantinus(Constantine))

仁德天皇の御代

大帝、再び天下を一統し、都をビザンチオン(Byzantium)に奠めて、これをコンスタンチノプル(Constantinople)と改め、元老院、及び、軍隊等の牽制を避け、專制政治を固定し、また、三二四年、キリスト教(Christianity)を國教としたり。

キリスト教の開基とその西流と

イエスキリスト(Jesus Christ)は、紀元前四年、アウグスツスの世に、ユダヤに生れ、長じて、自ら神子と稱し、一神教を開きて、平等博愛を說けり。その遺弟等、熱心に布教をつとめ、第一世紀の中頃には、ローマ府にまで、入り來りぬ。代代の皇帝は、キリスト教を以て、治安に害ありとなし、これを嚴禁したれど、歸依するもの、ますます多く、今や、遂に國教とせられしかば、その勢力、大に加はれり。

當時、キリストの性格に關して、種種の異說あり、延きて、社會の不安、國家の紛擾を起す恐れありしかば、コンスタンチヌスは、紀元三二五年、大に東西の宗教家を、ニケーア(Nicea)に會し、その決議により、キリストは、神人の中間に位すと主張せる、アリウス派(Arianism)を排斥し、その反對派を以て、正教(カトリック Catholic)となし、キリストは、全然、神と同一なりと定めたり。

ニケーア宗教會議

五胡の亂

ローマ帝國の兩分

三三七年、大帝、死するや、國內、再び亂れ、ペルシアとの戰爭も絕えず、ゲルマニも、しきりに寇し來れり。三九四年、テオドシウス一世、また、帝國を一統せしが、翌年、長子アルカヂウス(Arcadius)に東部を、次子ホノリウス(Honorius)に西部を讓りしかば、これより、ローマは、全く東西に分れたり。

第五章　ローマの國情及び文化

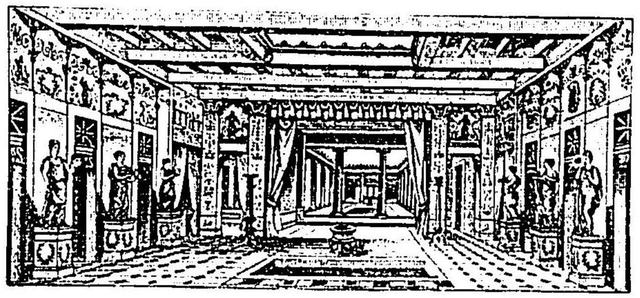
ローマの國情

ローマは、その地勢の優勝、人民の剛勇、兵制・軍紀の卓越、外交方針の一貫等によりて、しきりに四方を併呑し、つひに、有

史以來の大版圖を領有するに至りたり。ローマ人は、元來、統一的性質を有せるを以て、多くの屬地に、植民市を置き、その言語・習俗を入れて、他種族を同化し、漸次、これに同等の權利を分け與へき。これ、大にギリシア人と異なる所なり。

ローマの文化

ローマ室内の圖



ローマ人は、かく、ギリシア人とその性情を同じくせざりしかど、よく、ギリシアの文化を吸收して、普く、これを領土内にひろめ、世界文明の傳播に與りて大功をなせり。されど、實用を重んずる風ありしがため、學問・藝術は、遂にギリシア以上に進むこと能はざりき。ただ、法律に關する智識は、遙かに、他の諸民族に優りて、はやく、貴族と庶民とが、權を爭ひし昔より開け、漸く發達して、遂に大法典の制定となり、後世を益したり。

親族政治の遺風固守

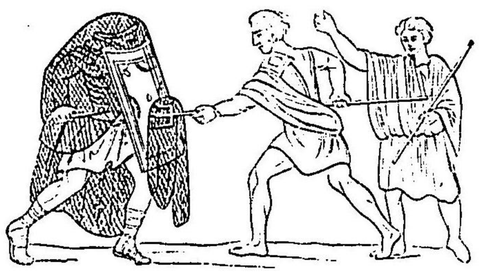
ローマ人は、祖先を尊ぶ風ありて、家ごとに、その肖像を飾り、宴會などには、これがために、杯を擧ぐるを例とせり。されば、子なき時は、他人を養ひて、家名の繼續を計りき。また、家長の權力、甚だ強く、一族の關係、頗る親密にして、各人、必ず、その姓名の外に、族名を冒せり。かの門閥政治の起りしも、これ等の事情に基けり。

鬪者格鬪の圖

ローマ族石細工。最右方に手を擧げ居るは行司なり

ローマ人の娯樂

ローマ人は、殺伐の風ありて、殘忍なる娯樂を好み、公開せる觀覽場にて、或は猛獸を格鬪せしめ、或は捕虜・奴隸をして、武器を執りて、相鬪はしめ、或は猛獸と相搏たしめ、婦



ローマ市民權の均授

人すら、觀て以て樂みとしたり。

初め、ローマ市民は、ひとり、多くの特權を有せしが、紀元前八九年、普くこれをイタリア人に許したり。後、また、他の諸民族の酋長・貴族等にも、特典として、この權を授けしことあり、二一二年に至り、遂に、これを全帝國民に及ぼしぬ。

上古史摘要

西洋史の上古期は、太古より、およそ、紀元第四世紀に至り、わが國にては、仁德天皇の御代の末頃、支那にては、東晉の末葉までに當る。

その初め、エジプト・バビロニア・アッシリア、まづ開け、その文明、頗る見るべきものあり。ヒタ・ヘブライ・フェニキア等の諸國も、その間に興り、互に攻戰・同盟等をなして、各、その獨立を維持せり。中にも、ヘブライ人は、宗教心、盛んにして、世界一神教の源泉をなし、フェニキア人は、便利なる文字を發明し、また、世界的商業の端緒を開き、共に異彩を放てり。その後、アッシリア、最も強盛となり、遂に、悉くこれ等諸國を併呑せしが、その亡ぶるや、メヂア・リヂア・バビロニア・エジプトの四國、對立せり。既にして、ペルシア勃興し、四國を併せ、更に東西に膨脹し、ここに始めて、大統一成り、特殊の文明を發揮したり。

この時、ヨーロッパに、ギリシア人あり。はやくより、航海・商業に從事し、ために、多くアジアの諸民族と競ひしが、ペルシアの大統一、成るに及び、大にこれと衝突せり。この衝突は、ギリシア人の、高潔なる向上心を刺戟し、國勢の隆盛と、學問・技藝の發展とを促し、終に、今のヨーロッパ文明の基を開きぬ。

この衝突の首腦となりしは、最も航海・商業に力めたるアテネなり。アテネは、進歩・民主主義なるを以て、保守・貴族主義のスパルタと、覇を爭ひて相鬩ぎ、スパルタ、遂に勝ちて、列邦を壓せしが、テーベの、これを挫くに及び、ギリシア列邦の間に、勢力の平均、保たれぬ。既にして、マケドニア、起りて、列邦を屈し、そのアレクサンドル大王は、ペルシアを伐ちて、東西交渉の宿題を解決し、ここに大統一の國を建てて、東西文化の融合を試み、世界史上に、一紀元を開けり。

フェニキア民族に屬するカルタゴ人は、地中海西部に於て、常にギリシア民族と衝突せしが、その勢力、漸く強大となり、地中海西部の海權を握り、既にして、イタリア民族を代表せるローマと、雌雄を決するに及び、その滅す所となりき。

ローマ人は、精力・常識、著しく發達せる勇壯の國民なりしかば、漸を以て、イタリアを一統し、カルタゴを倒し、その他、當時の開明・未開明の諸民族を征服して、地中海を領海とせる一大帝國を建設し、ギリシアの文化を吸收して、あまねく、これを廣大なる版圖に傳播し、諸民族を同化して、政治上・社會上・文學上・宗教上に、空前の大統一を作りたり。その末路、國家の中堅たるべき健全なる國民なく、大國の統治、困難となり、内亂、頻りに起り、經濟・武力、ともに衰へ、外蠻の侵寇を防ぐこと能はず、遂に、東西兩帝國に分れ、西帝國は、久しからずして、滅亡の悲運に迫れり。

第二部　中古史

第一篇　西ヨーロッパ混亂時代

第一章　種族の大遷移　西ローマの滅亡

ローマ帝國北方の諸蠻族

ローマ帝國の領域外なる、ヨーロッパの中部、及び、西北部に、ゲルマニ民族ありて、ゴート(Goths)・フランク(Franks)・サクス(Saxons)・ランゴバルド(Lombards(Langobarden))・ワンダル(Vandals)・ブルグンド(Burgundians)など、數多の種族に分れたり。ゲルマニは、天性慓悍にして、戰を好み、ローマ帝國の衰ふるや、漸く邊境に寇せり。

フンの壓迫と種族の遷移と

また、ヨーロッパの東北部には、スラフ民族(Slavonians)、占據し、その東に、モンゴル(Mongols)種の諸族ありき。

紀元第四世紀に至り、モンゴル種なるフン族(Huns)、今のロシア(Russia)のボルガ(Volga)河邊に入り來り、漸くスラフ諸種族を屈し、また、東

仁德天皇の御代、前八年田道蝦夷を擊ちて敗死す

諸種族の西轉

ゲルマニ人會議の圖

ローマ紀念碑の浮彫

西ゴート・ワンダル二王國の建設

ゴートを從へ、進みて、西ゴート(Ostrogoths)に迫れり。西ゴートの一部、これを避けて、三七五年、ドナウ(Visigoths)河以南の東ローマ領内に入れり。これ種族大遷移(Migration of Races)の始めなり。

その後、西ローマ帝國は、西方領土の鎭臺を撤して、西ゴートの擊攘に當らしめしかば、ゲルマニの諸種族は、その虛に乘じて、續續西轉し、フランクは、ガリア北部に、ブルグンドは、ライン(Rhine(Rhein))河上流地に、ワンダルは、イスパニアに入りたり。

四一〇年、西ゴート王アラリック(Alarick)、イタリアを侵し、ローマ府を陷れしが、その死するや、餘衆、西に移り、ガリア南部、及び、イスパニアの大半を占めて、西ゴート王國を建て

第二部　中古史

第一篇　西ヨーロッパ混亂時代

第一章　種族の大遷移　西ローマの滅亡

ローマ帝國北方の諸蠻族

ローマ帝國の領域外なる、ヨーロッパの中部、及び、西北部に、ゲルマニ民族ありて、ゴート・フランク・サクス・ランゴバルド・ワンダル・ブルグンドなど、數多の種族に分れたり。ゲルマニは、天性慓悍にして、戰を好み、ローマ帝國の衰ふるや、漸く邊境に寇せり。

フンの壓迫と種族の遷移と

また、ヨーロッパの東北部には、スラフ民族、占據し、その東に、モンゴル種の諸族ありき。

紀元第四世紀に至り、モンゴル種なるフン族、今のロシアのボルガ河邊に入り來り、漸くスラフ諸種族を屈し、また、東

仁德天皇の御代、前八年田道蝦夷を擊ちて敗死す

諸種族の西轉

ゲルマニ人會議の圖　ローマ紀念碑の浮彫

西ゴート・ワンダル二王國の建設

ゴートを從へ、進みて、西ゴートに迫れり。西ゴートの一部、これを避けて、三七五年、ドナウ河以南の東ローマ領内に入れり。これ種族大遷移の始めなり。

その後、西ローマ帝國は、西方領土の鎭臺を撤して、西ゴートの擊攘に當らしめしかば、ゲルマニの諸種族は、その虛に乘じて、續續西轉し、フランクは、ガリア北部に、ブルグンドは、ライン河上流地に、ワンダルは、イスパニアに入りたり。

四一〇年、西ゴート王アラリック、イタリアを侵し、ローマ府を陷れしが、その死するや、餘衆、西に移り、ガリア南部、及び、イスパニアの大半を占めて、西ゴート王國を建て

雄略天皇の御代、支那南北朝時代、

フンの盛衰

たり。ワンダルは、逃げて、アフリカに渡り、カルタゴの故地に據り、ワンダル王國を建て、海路より、屢、イタリアに寇せり。

その後、フンの勢、ますます盛んになり、酋長アチラ、ホンガリアを本據とし、ゲルマニの大半を糾合し、東帝國に迫りて、歳幣を納めしめ、更に西進して、ガリアを侵せり。四五一年、西帝國・西ゴート・フランク・ブルグンド等の聯合軍、カタラウヌムの原に邀へ、激戰してこれを退けたり。アチラは、轉じて、イタリアに入りしが、ほどなく死して、その大國、瓦解せり。

西ローマ滅亡

西ローマ帝國は、國力、ますます衰へ、四七六年、ゲルマニ傭兵の將オドワケル、つひに帝を廢し、自らイタリア王と稱したり。アウグスツスの政權を握りしより、四七六年にして、五百六年にして、西ローマ帝國、遂に亡びぬ。

東ゴート王國の建設

當時、東ゴートは、ホンガリアに居り、フンの衰へし後、漸く強大となり、四九三年、イタリアに侵入し、オドワケルを殺して、イタリアを領し、東ゴート王國を建てたり。

フランク王國の建設

フランク人フロドウィヒは、フランクの諸部を一統し、ブルグンドを從へ、西ゴート王國を蠶食し、五〇七年、都をパリーに奠めて、フランク王國を建て、勢力、大に振へり。

アングル・サクスの王國

ヨーロッパ西北海岸なるアングル・サクス等の一部は、第五世紀の中頃、今のイギリスに渡りて、先住のブリトン人を征服し、やがて、七王國を建てたり。後、八二七年に至り、統一、始めて成りて、一王國をなせり。

東ローマの形勢

第二章　東ローマとペルシアと

西ローマは、種族の遷移のために、つひに滅亡し、東ローマも、分立以來、外、ペルシアと兵を交へ、内、宗教上の爭ありて、勢、

欽明天皇の御代
支那梁の武帝の世

ユスチニアヌスの中興

漸く衰へしが、五二七年、ユスチニアヌス(Justinian(Justinianus ラ))帝、即位するに及び、政教の宿弊を一掃し、有名なる大法典を編纂し、學藝・實業を奬勵し、國勢、再び振へり。帝の世に、養蠶の法、はじめて、支那より傳はれり。

ローマ帝國恢復の企圖

ユスチニアヌス帝

ラウェンナの寺にある同時代の厭石細工

ユスチニアヌスは、また、昔のローマ帝國の版圖を恢復せんとし、兵を出して、ワンダル・東ゴートの二王國を滅し、アフリカの北岸と、イタリアとを併せ、なほ、イスパニア東南部をも恢復したり。

東ローマの不振

帝の死後、國勢、また振はず、スラフの諸部は、バルカン(Balkan)半島を横行し、モンゴルの一種族アワール(Avars)は、ホンガリアに據りて、しばしば邊境を侵せり。これよりさき、五六八年に、ランゴバルド族、ホンガリアより、イタリアの北部に來りて建國

この年聖德太子憲法十七條を制定す

唐の太宗貞觀元年

東ローマとペルシアとの決鬪

ホスロー二世貨幣

せしかば、東帝國は、ただ、ローマ・ラウェンナ(Ravenna)、及び、南イタリアを保つのみにて、威令、つひに西方に行はれざりき。

東ローマは、また、絶えずペルシアと、干戈を交へて、互に勝敗ありしが、ペルシア王ホスロー二世(Chosroes)、東ローマの内亂に乘じ、六〇四年、大舉して侵入し、都コンスタンチノプルを危くしたり。ヘラクリオス(Heraklios)帝、これを破り、追擊して、敵都クテシフォン(Ctesiphon)に迫り、六二八年、和を結びぬ。この戰役は、兩國を疲弊せしめ、サラセン(Saracen)の雄飛に、好機を與へたり。

イスラム教開基

第三章　サラセンの勃興

サラセンの祖ムハメッド(Muhammed(Mahomet))は、五七一年、アラビアのメッカ(Mecca)に生れ、四十歳の時、自ら上帝の聖使なりと稱し、イスラム教(Islam)回教を

前年聖德太子薨ず

唐の太宗の世

サラセン建國

サラセン膨脹

イスラム教徒禮拜の圖

創めしが、メッカ市民の迫害を受け、六二二年、メヂナ(Medina)に逃れたり。この年は、即ち回教紀元の元年なり。ムハメッドは、まづ、兵力を以て、メッカを取り、つぎて、アラビア(Arabia)全土を征服し、政教の兩權を一身に統べて、サラセン(大食)國の基を開き、六三二年に死せり。

ムハメッドの繼承者は、ハリファ(Khalifah)と稱し、よく、始祖の志をつぎ、コーラン(回教聖書)朝貢・劍戟の三者を以て、四方に臨み、東ローマを侵して、シリア・エジプトを略取し、六四二年、ペルシアを滅して、唐と境を接するに至れり。その後、サラセンは、地中海の諸島、及び、アフリカ北岸なる東ローマの領土を席卷し、更にイスパニアに渡りて、七一一年、西ゴートを滅ししが、フランク國を犯すに及び、その宮宰(マヨルドムス)カロロマルテル(Charles(Carolus) Martel)に擊

聖武天皇の御代

唐の文化隆盛を極む

サラセン分裂

サラセンの文化

退せられたり。これ、教祖死後一百年、即ち七三二年の事なり。

當時、サラセンは、東はインド河より、西は太西洋に達する大版圖を保ちしが、ほどなく、内亂起りて、國、遂に兩分し、東ハリファは、都をチグリス河上のバグダード(Baghdad)に奠め、西ハリファは、イスパニアのコルドバ(Cordova)を都とせり。

東西兩ハリファ朝は、競ひて學藝の進歩を計り、産業を興し、通商を奬めしかば、第八世紀の後半より、第九世紀に入りて、最も富み榮え、上古の各國の文化を集め、なほ、大に數學・天文學・理化學等を發展したりしかば、文物の盛んなりしこと、遠く、當時の西ヨーロッパ諸國に優り、今日の文明に貢獻する所、尠からず。かの、火藥、及び、羅針盤を、支那より傳へたるも、また、サラセンなりといふ。

ギリシア帝國の回天の理想

その不成功の原因

ローマ法王の半獨立

第四章　ギリシア皇帝とローマ法王と

東ローマ帝國は、ギリシア語を用ゐ、ギリシアの文化を傳へしを以て、通常、これをギリシア帝國といふ。ギリシア帝國は、歴史上、舊ローマ帝國の繼承者なれば、常に、一旦、亡びたる西ローマの版圖を恢復し、再び、もとの大帝國となすことを理想とせり。(Greek Empire)　然るに、内部の紛擾と、ペルシア・サラセン等との交戰とありて、國力を蕩盡し、かつ、ローマ大長老と、フランク國との結托成りて、これに對抗しければ、この大理想は、つひに水泡に歸したり。(Patriarch)

ローマの大長老は、帝國五大長老の一にして、他と同じく、皇帝に隷屬せるものなるが、代代、俊傑出でしがために、威權、自ら重くなれり。特に、グレゴリオ一世(五九〇―六〇四)は、ゲルマニ(Gregory(Gregorio g.))

聖德太子と蘇我馬子と佛教を興隆せる頃

聖武天皇の御代、後十九年東大寺の大佛の鑄造を始む

ギリシア皇帝の像　バシリオス帝(八六七―八八六)の命によりて成りたる聖グレゴリオ說法寫本の挿畫にて當時皇帝が威嚴を加ふるの目的なりて大にその服裝を飾り光彩陸離金色燦爛たる樣寧ろ濃厚沒趣味の感あらしむ

偶像禁止令と法王と

人が、或は全くキリスト教を奉ぜず、或はアリウス派に歸依せるがために、ローマ人との調和、益々困難なるを憂へ、宣教師を派して、布教を力め、六〇〇年頃までに、多くは、正教に歸して、やや、ローマの文化に浴せしめたり。(Arianism)(Catholicism)　かくて、ローマ大長老は、皇帝の制裁の及ばざる地方に、威力を有し、自ら半獨立の姿をなして、パッパス(父の義)の稱號は、天堂の鍵を握れる法王を意味するに至れり。(Pappas)(Pope)

ギリシア皇帝レオ三世(Leo)、英邁にして、諸種の宿弊を除き、七二六年、偶像禁止令を出せり。然るに、ローマ法王は、偶像崇拜が、未開人教化に便にして、また、寺院維持の主要なる財源なりしを以て、極力、この禁令に反對し、爾後、紛爭、數十年に及

法王とフランクとの結托

法王領の始め

東西正教分離

びき。たまたま、ランゴバルド人、イタリアなる帝領を略し、ローマに迫らんとせしかば、法王は、援をフランクに請へり。

フランク國は、五一一年、フロドウィヒの死せし後、ますます強大となりしが、王權、漸く衰へて、宮宰（マヨルドムス Major domus）、實權を握れり。宮宰カロロ＝マルテル、サラセンを擊退して、キリスト教のために、大功を立てしが、その子ピピン（Pepin(Pipin F.)）に至り、七五一年、法王の贊同を得て、王位を簒ひ、法王のために、ランゴバルドを征し、附近の地を寄進せり。これを法王領（State of Church）の始めとす。かくて、法王は、全くギリシア皇帝と絶ちしかば、西方のローマ正教（Roman Catholic）は、全く東方のギリシア正教（Greek Catholic）と分離したり。

桓武天皇の御代、この頃阪上田村麻呂の蝦夷征伐あり

西ローマ帝國再興

カロロ大帝の外征

カロロ大帝の治

第二篇　政教大統一理想時代

第一章　カロロ大帝（Charlemagne(Carolus Magnus ラ)）の業

七六八年、フランク王ピピンの子カロロ立つ。英明にして大略あり、まづ、ランゴバルドを滅して、イタリア王を兼ねたり。當時、サクスは、エルベ（Elbe）・ライン兩河の間に、バユバリは（Bavarians(Bajuvari ラ)）、ドナウ河上流に國し、サクス、最も強暴なりき。カロロは、バユバリを併せ、アワールを逐ひ、屢〻兵をサクスの間に用ゐ、これを征服して、キリスト教に改宗せしめ、また、北狄ノルマン（Normans）の寇を退け、イスパニアのサラセンを征して、その北境を取り、ローマ衰微以來、西ヨーロッパ未曾有の大國を成したり。

かくて、カロロは、八〇〇年、ローマに於て、法王レオ三世より、帝冠を受け、西ローマ皇帝と稱しぬ。

カロロ大帝は、都をアーヘン（Aachen(Aix-la-Chapelle ラ:フ)）に奠め、深く心を內治に注げ

り。即ち、國内を數多の縣に分ち、伯を置きて、これを治めしめ、毎年一回、貴族・僧侶・兵士等を會して、その助言を求め、農工を保護し、學校を興し、學者を優遇し、寺院を建て、專ら國内の統一と秩序の成立とを期したり。

カロロ大帝乘馬像
銅の小像、寫生なるらし

帝國の分裂

八一四年、帝、死せる後、その子孫等、領土を爭ひ、紛擾やまず、これにより、ローマの文化は、漸くゲルマニの風習と融和せり。

ドイツ・フランスの基

八四三年、遂にベルダン條約(Verdun)を結びて、帝國を三分せしが、八七〇年、メルセン條約(Mersen)により、東フランクと西フランクとは、その中間の地を併せ、今のドイツ・フランスの基を開き、イタリアは、分れて、數多の分國を成しぬ。

東西フランクは、ノルマンの寇に苦み、一時、再び合同せし

一　カロリンガ王朝系圖（Carolingians Caroviugians）

（すべて、名の下若くは横にある數は、在位の始終を示し、その一個なるは、死せる年を示す。）

- フランク國宰相 ピピン（七一四）
  - 宰相 カロロ・マルテル（七四一）
    - フランク王 ピピン（七五一・七六八）
      - フランク王、西ローマ皇帝 カロロ大帝（七六八・八一四）
        - ロメリンギア王 ロタール一世帝（八五五）
          - ルイス二世帝（八五五・八七五）……イタリア
        - 東フランク王 カロロマン（八八〇）
          - アルヌルフ王（八八七・八九九）
            - ルイス王（九一一）……
        - ルイス（八七六）
          - カロロ三世帝（一時東西フランク國を併領せしが無能にして廢せられ八八八年死す）（八八一・八八七）……
            - ルイス一世帝（八一四・八四〇）
            - ルイス二世王（六代を經て、その玄孫ルイス五世、九八七年に死して、子なし）（八七六・八七七）（八七九）……フランス
            - 西フランク王 カロロ二世

が、八八七年、東は、アルヌルフ(Arnulf)を立て、西は、その翌年、ノルマンを防ぎて功ありしパリー伯オドー(Odo)を立てて、王となせり。

第二章　ノルマンの跋扈

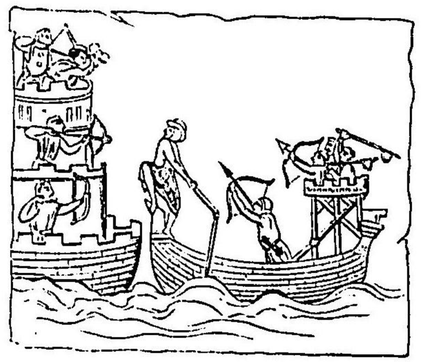
ノルマンの原住地、その習性

ノルマン(Normans)は、今のスウェーデン(Sweden)・ノルウェー(Norway)・デンマルク(Denmark)に住せしゲルマニの一派にして、曾てローマの文化に浴したることなく、性質、勇悍にして、冒險を好み、航海に長じ、第九世紀頃より、船に乘じ、四方に出でて、刼掠を恣にし、つぎて、土地を侵略し、しきりに、ヨーロッパ沿海諸國をなやましたりき。

フランクに於けるノルマン

フランクは、カロロ大帝の時に、既にノルマンの侵寇を被り、爾後、その患、ますます甚しかりき。東フランク王は、よく、これを防ぎたれども、西フランクにては、國王、これが防禦に苦み、九一一年、その酋長ロロ(Rollo)を、ノルマンディー(Normandy(Normandie))公に封じて、和

ノルマン攻城の圖
第九世紀のアングロサクスの記錄にある畫



を講じ、わづかに、禍を絶つことを得たり。

デンマルクのノルマン人は、しきりに、イギリスを侵し、アングロ=サクスの名主アルフレド大王（Alfred the Great 八七一—九〇一）など、大にこれが撃攘に苦心せり。然れども、第十一世紀の初めに至り、つひに、全く征服せられ、カヌート大王（Canute）は、デンマルク・イギリス・ノルウェー、及び、スウェーデンの一部を併せ領し、勢威、遠近に振へり。後、アングロ=サクスの舊王統、一たび、恢復せられしが、一〇六六年、ノルマンヂー公ウィルレム（William）、イギリスに渡り、ヘースチングス（Hastings）の戰に勝ちて、ノルマン王家の祖となれり。

ノルマンは、第九世紀以來、地中海上に現れ、沿岸の諸民族

四年前に前九年の役終る

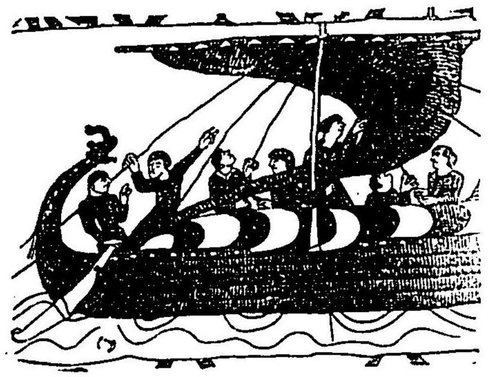
イギリスに於けるノルマン

地中海に於けるノルマン

ノルマンの船
バユー刺繍さてウイルレム一世がイギリスを平定したる後久しからずして成りたる繡畫なり根本史料としてのみならず當時の風俗を知るに最も必要なる珍貴の材料なり今ノルマンヂーのバユー市にあり

を苦めたり。第十一世紀の初めに、ノルマンヂーの武士、南イタリアに至り、機に乘じて、土地を略し、シチリアより、サラセンを逐ひ、ナポリ（Naples）王國を建て、しばしば、ギリシア帝國を侵し、養蠶職工を奪ひ還り、始めて、この業をイタリアに移せり。

同じく第九世紀の中頃、スウェーデンなるノルマンの酋長ルーリク（Rurik）、今のロシア（Russia（Rossija））西北の地に入り、スラフ人を屈して、ロシア國の基を創めたり。ルーリクの嗣イゴル（Igor）、キエフ（Kiev）を略して、ロシアの大部を一統し、これより、しばしば南下して、ギリシア帝國に寇し、つひに、その文化を傳へぬ。



ノルマンの船

北アメリカに於けるノルマン

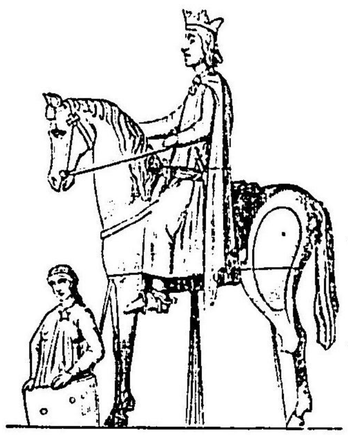
ノルマンは、また、第九世紀の末に、西北方に航して、イスランド(Iceland)・グリーンランド(Greenland)に植民し、今の北アメリカの東北岸をも發見し、一時、これに植民せることありき。

ドイツの選擧王制

村上天皇の御代、前二年趙宋興る

第三章　神聖ローマ皇帝とローマ法王と

東フランク、即ちドイツにては、第十世紀の初めに、諸侯が、王を選立する制、起りぬ。オット一世(Otto I)王(九三六―九七三)は、英邁なる君にて、内は、諸侯を抑へ、外は、第九世紀の末より、ホンガリアに據れるモンゴル種のマジャル(Magyar)を破りて、永くその入寇を絶ち、また、イタリアを平げ、九六二年、法王より帝冠を受けて、神聖ローマ帝國(Holy Roman Empire)皇帝と稱せり。



オット一世乘馬像　マグデブルグ市にある石像第十三世紀の作

神聖ローマ帝國の始め

皇帝の大理想

神聖ローマ皇帝は、カロロ大帝の再興せる西ローマ帝國の繼承者にして、キリスト教を保護擴張し、宇内を一統するを以て、その理想とするが故に、その位は、自ら各國君主の上にあり。オット一世以來、ドイツ王は、神聖ローマ帝を兼ぬるを得ることとなりければ、歴代、概ね力をイタリア經營に傾け、法王を羽翼とせんと欲し、教會の洗滌を計り、僧官を任命し、その權勢は、ヘンリ三世(Henry(Heinrich)三)一〇五六年死に至りて極まりぬ。

法王の大理想

既にして、教會の洗滌、行はるるや、法王の理想、また、漸く向上し、俊傑グレゴリオ七世(一〇七三―一〇八五)に至り、皇帝以上に立ち、一切衆生を統率せんとの大願を起し、その未だ頭僧官(カルディナル)たる頃より、僧侶の風紀を正し、僧官の賣買を禁じ、法王の選立は、頭僧官の選擧によることとし、のち、自ら法位に登るに及び、僧官封地の權(インベスチツール Investiture)を、皇帝の手より奪はんとせり。

皇帝と法王との衝突

ヘンリ三世の子ヘンリ四世、一〇五六—一〇六六 また英邁にして、諸侯を壓し、王權を張れり。その法王の侵權に遇ふや、ここに兩元首の間に、大衝突起り、王は、法王を廢し、法王は、王を破門し、その臣民に服從の義務なきことを宣しぬ。ドイツ諸侯、この機に乘じて、廢立を謀りしかば、王も、やむなく、一〇七七年、法王をカノッサ(Canossa)城に訪ひて、哀を請ひ、僅かに破門を免されき。既にして、ドイツ人民の勤王心、盛んに起りければ、王は、兵を率ゐて、イタリアに入り、グレゴリオ七世を廢して、クレメンス(Clemens)三世を立て、已に帝冠を加へしめたり。グレゴリオ七世は、南イタリアに奔りて、憤死せり。

カノッサ城址現景

白河天皇の御代僧徒暴横を極め不如意の歎あらしむ

カノッサの屈辱

法王黨(グルフ)帝黨(ギベリン)の爭

その後、皇帝と法王との爭、ますます甚しく、一一三八年以來、スタウフェン(Staufen)家、ドイツに君臨するや、その反對黨は、法王と提携して、これに抗しければ、フレデリキ(Frederick(Friedrich F.))一世一一五二—一一九〇の勇武を以てして、遂に統一を完成すること能はず、黨爭、ますます激しくなりて、同時に、二王を見るの奇態を呈せり。

インノケント三世の成功

この頃僧親黨あり

法王インノケント(Innocent)三世一一九八—一二一六 豪邁の資を以て、歷代の積威により、各國君主を威壓して、その政治に干渉し、特にドイツの黨派を操縱して、皇帝を廢立し、宛然、西ヨーロッパの統裁者たる有樣なりき。これを法王權の極盛時とす。

大空位時代

ドイツにては、ほどなく、スタウフェン家絶え、爾後、紛擾、ますます甚しく、一二五六年より、一二七三年まで、十八年間は、一統の君なかりき。これを大空位(インテルレグヌム)時代(Interregnum)といふ。

サラセンの衰微

セルジュクトルコ崛起

十字軍の近因

第四章　サラセンの衰微　十字軍

一時、隆盛を極めたる東・西ハリフ朝は、後、共に漸く衰へ、エジプトには、別にファチマ朝のハリフ興り、イスパニアには、土民、カスチリア・アラゴン・ポルトガル等のキリスト教國を建て、東方には、第十一世紀の初めに、セルジュクトルコ人、ペルシアの北部に起りて、漸次、西アジアを取れり。

さきに、サラセンは、キリスト墳墓の地なるイェルサレムを取りしより、キリスト教巡禮者のために、利を得ることを悅び、これを妨害せざりしが、セルジュクトルコ人が、この地を略取するに及び、大に巡禮者を虐待したり。たまたま、ギリシア皇帝も、セルジュクトルコの侵略に苦み、援を法王に求めしかば、法王ウルバノ二世は、機に乘じて、ますます、法王權を伸

白河法皇院政時代

十字軍の遠因

十字軍

十字軍の始め

べんと欲し、グレゴリオ七世死後十年、即ち一〇九五年に、諸國の僧俗をクレルモンに集めて、大に十字軍を勸めたり。

當時、法王の權力、甚だ強く、人民の宗教心も、極めて篤く、尙武の風、また盛んなりしかば、一には、サラセンの勃興してより、久しく壓迫を忍びたりし反動として、西ヨーロッパの君民、擧りてこれに應じ、一〇九六年、十字章を著けたる民衆四十萬、奮ひて征途に上れり。これを第一十字軍とす。

第一十字軍

第一十字軍は、コンスタンチノプルを經て、アジアに渡り、一〇九九年、イェルサレムに達して、これを陷れ、主帥ロートリンゲン伯ゴドフレド(Lothringen F.)を推して、聖地守護者となし、つぎて、イェルサレム王國を建てたり。(Geoffrey(Gottfried F.)(Godofredo ス))既にして、イェルサレム王國は、セルジュクトルコに攻められければ、第二十字軍、一一四七—一一四九これが救援を圖りて成らざりき。

第三十字軍

前二年壇浦の役

つぎて、サラヂンといふもの、エジプトに起り、一一八七年、イェルサレムを取りしかば、フレデリキ一世帝、これを親征し、同時に、フランス王フィリポ二世(Philip)・イギリス王リチャード二世(Richard)は、海上よりシリアに上陸せしかど、皆、多く得る所なかりき。

第四十字軍

第四十字軍は、法王インノケント三世(六七頁參照)の命により出征したるものなりしが、ギリシア帝位爭奪の亂に干渉し、また、つひに當初の目的を貫かずして止みぬ。

第五・六・七十字軍

前十年弘安の役あり

一二二八年、フレデリキ二世帝、第五十字軍を起し、一たび、イェルサレムを恢復したれども、一二四四年、エジプトのために、また陷れられければ、フランス王ルイス九世(Louis)、第六十字軍(一二四八—一二五四)を起し、エジプトを伐ちて利あらず、一二七〇年、さらに、第七十字軍を起し、チュニスのサラセン海賊を伐ち、また功なく、一二九一年、アッカ(Acre(Akkaの))陷りて、キリスト教徒は、全くアジアの根據を失ひき。

第五章　イギリス・フランスの發達

ドイツ・フランス・イギリスの大勢

ドイツにては、國王、過大の理想に馳せ、ために、反りて、國内の統一を害せしが、フランスにては、代代、明君出でて、人民と結托し、貴族を抑へ、王權を强め、國威を張れり。イギリスにては、暗主・暴君、政を失ひ、國權を墜ししかば、人民は、王と貴族

フランスに於けるイギリスの勢力

との間に立ちて、よく憲法政治の利を占むることを得たり。

ウィルレム一世（一〇六六―八七）は、イギリス侵略の後、六二頁参照大に、フランス語、及びその習慣を採り入れたり。イギリス王は、もと、フランスの大諸侯なるが、相續・結婚等によりて、益、フランスに於ける領土を加へ、同國の王領よりも、遙に大となれり。

フランス王權擴張の企圖

フランスにては、九八七年、カロロ大帝の血統絶え、フーゴー（Hugue）カペー、王となりて、カペー朝を創めしが、そのはじめ、諸侯跋扈（Capet）して、王權振はず、パリー・オルレアン（Orléans）附近の地を、直轄するに過ぎざりき。フィリポ二世（一一八〇―二三）雄略あり、内、王領を擴張し、外、イギリス王リチァード一世に當り、リチァードの弟ジョアン（John）王（一一九九―一二一六）が、暗弱兇暴なるに乘じ、封建君主として、その罪を責め、所領の大半を沒收し、その侵入軍を破り、王權、始めて強大となりぬ。されど、イギリスは、尚、南部の大半を保ち、

イギリスとの關係

フランスとの爭、絶えざりき。

フランス王權の固定

フィリポ二世の孫ルイス九世（一二二六―七〇）は、智德兼備の明君にして、大に王權を張り、學問・美術を奬勵し、南部に蔓延せるアルビジョワ（Albigeois）派を鎭壓して、王領を增し、また、第六・第七十字軍を起したり。その孫フィリポ四世（一二八五―一三一四）、父祖の遺業を承け、イギリスと戰ひ、軍資の缺乏を感じ、租稅を寺院に課せんとするや、時の法王ボニファキオ八世（Boniface（Bonifacio ?））、グレゴリオ七世の遺志を守りて、王の、この權利なきことを主張せり。

三部會の始め

ここに於て、フィリポは、始めて、貴族・僧侶、及び、平民の代表者より成れる三部會（エタージュ・ゼネラー States General（Etats Généraux ?））を設け、その贊助を得て、法王と抗爭し、つぎて、これを廢し、國人クレメンス五世を立てて、國内アビニョン（Avignon）に居らしめ、迫りて、テンプル武士團を解散せしめ、その領

法權の屈從

後四年公曉實朝を弑す

イギリス憲法の基

テンプル團武士

憲政の固定

土を沒收しき。テンプル武士團は、十字軍後、その本部をパリーに置き、各地に領土を有せしなり。これより六十八年間、法王は、アビニョンにありて、フランス王の頤使に從ひぬ。

イギリス王ジョアンは、對フランス事件に失敗せしのみならず、法王インノケント三世に屈服して、臣と稱し、かつ舊例を破りて、しばしば、重稅を課せしかば、一二一五年、諸侯・僧侶等、王に迫り、舊慣に基ける大憲章に署名せしめ、イギリス憲法の基を成せり。後、ジョアンの子ヘンリ三世一二一六、一二七二、大憲章を無視せしかば、シモン・ド・モンフォール等、王をして、諸侯・僧侶の外、州市の代議士を召集して、國會を開かしめたり。これ、イギリス國會下院の濫觴にして、爾來、その立憲制度は、ま

ギリシア帝國の衰弱

ギリシア帝國の顚覆

ラテン帝國の建設

すます、發達せり。

第六章　東ヨーロッパの形勢

ギリシア帝國は、東にセルジュクトルコ、北にブルガル種蒙古及び、ロシアなどのスラフ諸種族、西にベネチア、及び、ナポリマンありて、屢侵寇し來り、時時、明主出でて、これを擊攘しけれども、國力は、ために、漸く疲弊せり。

第十二世紀の末葉に、帝位爭奪の亂あり。第四十字軍、七〇頁參照及び、ベネチア人、これに干涉し、一二〇四年、つひに、コンスタンチノプルを陷れ、ラテン帝國を建てて、フランドル伯バルドウィンを皇帝とし、封建制を施き、ベネチアに、ギリシアの南端、及び、西岸諸島・クレテ島等を割與したり。ラテン帝國は、統一、鞏固ならず、民心、服せざるに、前帝國の餘類、ニケー

一條天皇の御代藤原氏權力を專らにす

ロシアのギリシア文化輸入

中古西ヨーロッパの宴會

古き寫本挿畫

ロシアの分裂

ポーランドの形勢

モンゴルの西侵

ア帝國・トラペズント帝國を起し、また、北方にブルガル、小アジア中部にコニア(Trapezunt, Bulgar, Konia)ありて、入寇、絶えざりき。

ロシアにては、イゴル(六三頁參照)の孫ブラヂミル一世、九八八年(Vladimir, 988)、ギリシア帝室と婚し、ギリシア正教を國教とし、大にその文化を輸入せしが、後、内亂を生じ、數多の侯國に分れぬ。

ロシアの西には、同じスラフ種民のポーランド(Poland)あり。初め、ドイツに屬せしが、一〇七六年、全く獨立せる王國となりぬ。後、内訌ありて、國内統一を失へり。

時に、モンゴルの酋長テムチン(Temutchin)鐵木眞、北アジアの大半を征

キプチャク國建設

バグダードの陷落

イルカン國の建設

チャガタイ國及び元朝

服し、進みて、南ロシアを侵しき。その孫バツ(Batu)拔都、再び西侵し、ロシアを服して、ポーランドに突進し、一二四一年、ワールスタット(Wahlstatt)の原頭に、ドイツ等の軍を破り、また、ホンガリアを侵して、焚掠を恣にせり。かくて、バツは、キプチャク(Kipchak)國欽察國を建て、ロシアの諸侯をして、臣事せしめたり。

モンゴルは、また、西アジアを侵略し、一二五八年、東ハリファの都バグダードを陷れて、これを滅し、イルカン(Ilkhan)國を建てたり。この頃、西ヨーロッパは、回教國に當らんため、欵をモンゴルに通ぜしかど、エジプトのマメルク(Mameluks)モンゴル人備兵の軍隊第六十字軍を退け、サラヂンの子孫を滅して、エジプトを領し、イルカンの西侵を防止せしかば、功なくしてやめり。

右の外、中央アジアのチャガタイ(Tchaghatai)國、支那の元朝、みな、テムチンの子孫の建てしものなれど、その間に、統一を缺きしかば、

モンゴルの勢は、漸く衰へたり。

第七章　中古西ヨーロッパの社會及び制度

西ヨーロッパ中古時代の大半を、暗黑時代（Dark Age）といひ、ギリシア・ローマの文化は、僅かにキリスト教僧侶の力によりて、全滅を免るることを得たれば、僧侶の外には、文字を識る者、殆んどなく、上下、迷信の淵に沈み、陰鬱・因陋の風を成し、一たび、破門の罰に處せられしものは、王侯と雖も、社會の擯斥を免ることと能はざりき。

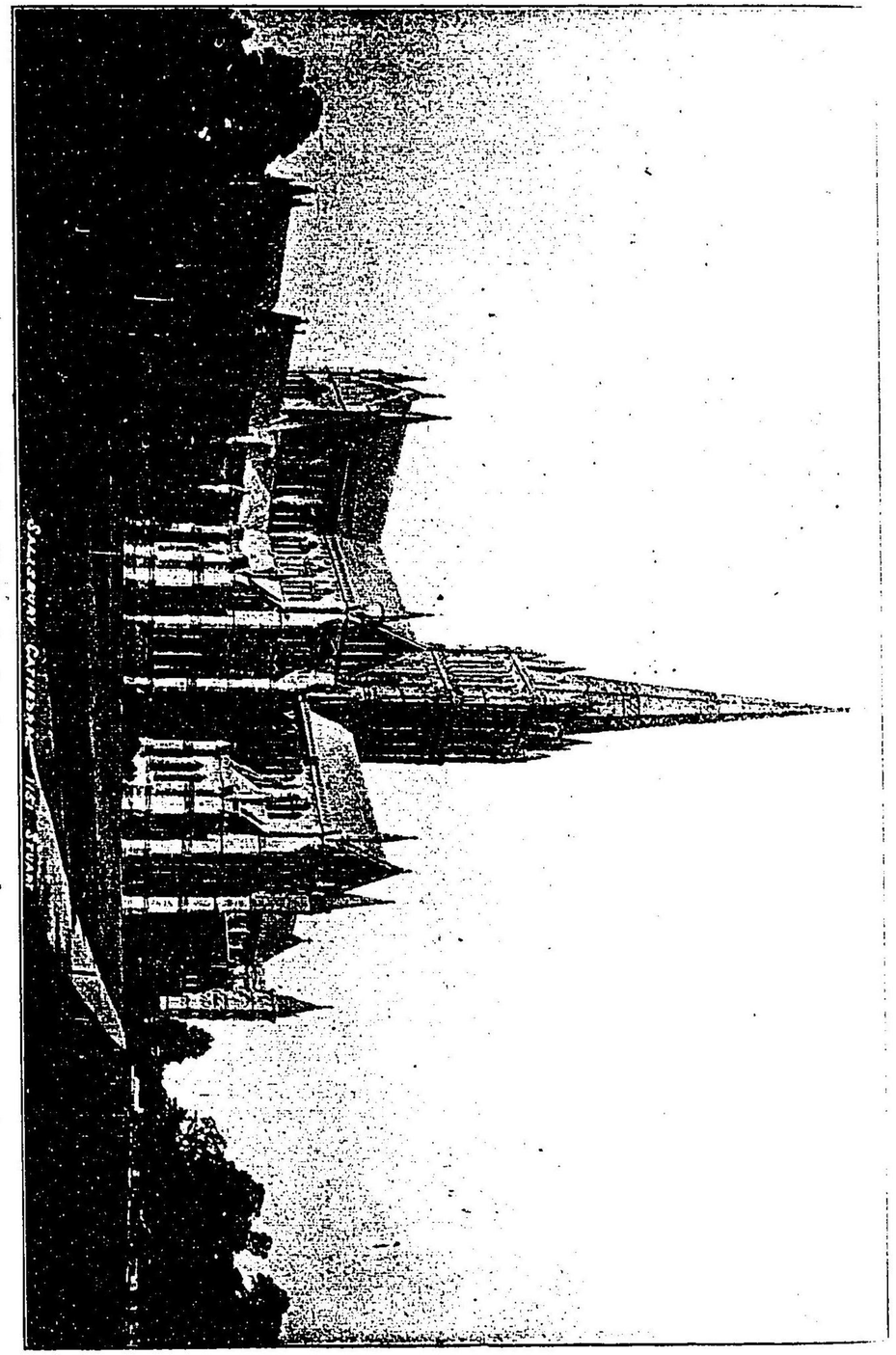
暗黑時代

宗教の勢力

されば、寺院、繁昌を極め、信者の寄進に依りて、資財豐かに、大堂・巨刹、到る處に建立せられたり。

封建制度

フランク國勃興の頃、貧者は、連年の戰爭のために、生活困難に陷り、地方の豪族に賴りて、平生、その土地を借り、戰時は、その部下となりしが、後、その風、漸く盛んに行はるるに至れ



眞寫藍伽大ーリスヤーツ

本圖に示せるは、イギリス南部の一小市ソールスベリー(Salisbury)の大伽藍Cathedral)なり。この大伽藍は、ヘンリ三世王の時、一二二〇年四月二十日に、はじめて、その礎石を据ゑ、一二六〇年に至りて落成したるものにて、費用の總額、實に二十八萬圓を算せり。(今の價格にして、約五百萬圓なり)その全長四百七十三呎、西正面の幅一百十一呎三、塔の高さ四百呎あり。これをドイツ國ケルンの大伽藍(Kölner Dom)に比すれば、その大さに於て、やや遜色あれども、建築美に於ては、或はこれを凌駕する所あり。加之、ケルンの大伽藍が、長年月に亘り、第十九世紀に至りて、完成竣功せるに反し、比較的短期なる四十年間に成りたるを以て、各部の樣式、よく一致し、時代精神を十分に發揮して餘りあるなり。本寺は、初期ゴート式(Early Gothique 又 Pointed Style)の上乘なるものにて、圖は、その東北部の眞を寫したるもの、伽藍各部內外の權衡の整然たるは、實に嘆賞措く能はざる所とす。フェルガソン(Fergusson)嘗ていへり、この大伽藍は、中世に於て、各部權衡の、最も卓越し、かつ、最も詩的なる設計の一なりと。蓋し過賞にあらざるなり。

フランスのピエルフォン城、寫眞

武士及び武士道

り、カロロ大帝死後、その國の亂るるや、六〇頁參照地方官、及び、高僧等は、多數の家臣を養ひ、土地を與へ、誓を立てて、君臣主從の義を結ばしめ、上下共に、相賴り相衞りて、自ら、强くせり。

この封建制度(Feudal System)は、第十世紀頃に整ひ、凡そ五百年間、あまねく、西ヨーロッパ諸國に行はれ、帝王は、諸侯を封じて、家臣となし、諸侯は、その將士に知行を與へて、家士となし、將士は、領地の民を以て、家人となし、兵農、全く別れて、武士、起りたり。

武士(Knight)は、武勇を尙び、婦人を敬ひ、忠君・護法の精神、任俠・廉耻の氣性を重んぜしかば、一種の武士道(Chivalry)、ここに發達したり。

およそ、武士たらんと欲するものは、幼時より、王侯・貴婦人の扈從となりて、禮節を習ひ、つぎて、武士の從士(Squire)となりて、武藝

を修め、武士道を磨き、然る後、嚴肅なる儀式を設けて、必ず武士道を立つるを誓ひ、さて、始めて許されて、武士となるなり。武士は、時時、武藝の競技(Tournament)を行ひ、花花しき勝利を得、貴婦人より、賞與を受くるを名譽とせり。

宗教的武士團

武士忠誠を誓ひて知行を受くる圖

サクソニア鑑といふドイツ中古の法律の最古寫本にある挿畫

十字軍時代に至り、宗教的武士團起れり。聖地保護を目的とせるテンプル武士團(Knights Templars (Tempelherrn F.))、ヨハネス武士團(Knights of Saint John (Johanniter F.))、及び、ドイツの東北部にありて、異教のスラフ族の侵寇を防ぐを目的とせるドイツ武士團(Knights of Teutonic Order (Deutscher Orden F.))等は、その名、最も高し。

農民の狀態

中古の西ヨーロッパに於ては、僧侶、または、武人にあらざれば、殆んど、人にあらざるの觀あり、農民は、領主の誅求・壓制に苦められて、甚しく困窮し、氣力銷沈せり。十字軍の結果、生活費の膨脹するにつれて、小領の武士は、益、農民を虐使し、或は、旅客を途に要して、これを掠むるに至れり。

商人の狀態

市府は、農民の困窮疲弊せるに反して、漸く勃興せり。元來、商人は、比較的敏捷活潑なるものなれば、利益のためには、危險をも辭せざるを常とす。かくて、その漸く富裕に赴くに及び、富の力によりて、領主より、自治制、その他の特權を買ひ、また、傭兵を置きて、その利權を保護・擴張することを力めき。特に十字軍の起りしより、諸侯・武士等、軍資に窮して、市民に金を借り、或は自治制等を免許せる者多く、かつ、この遠征のために、交通開け、通商、大に興りしかば、市府は、著しく發達したり。

中古の農民サクソニア鑑の挿畫

市府の發達

その、まづ、隆盛に赴けるは、イタリアのベネチア・ミラノ・ジェ(Milan (Milano It.))

ノバ・フィレンツ等にして、その殷富は、時人の驚歎せしところなりき。つぎて、イギリス・フランス・ドイツ・イスパニア等にも、市府、漸く發達し、或は城壁を繞らし、兵勇を雇ひ、海軍を備へ、或は同盟を結びなどして、商路の安全をはかり、または、帝王侯伯より、自治を要取したり。中にも、ドイツのハンザ聯合は、數十市を包括し、リューベックを盟主として、ヨーロッパの商權を握り、一時、非常なる勢力を有したりき。

Genoa(Genova) Florence(Firenze) Lübeck Hansa

第三篇　國家主義發生時代

第一章　法權の衰微　帝權の不振

世運の一轉と法王と

中古、西ヨーロッパの人心は、宗教の束縛と、封建の壓制とのために、甚しく萎縮せしが、人口の增殖は、民心の活動を催進し、十字軍の結果は、封建制度を衰微せしめ、人智を開發し、生産を振興せしめ、宗教熱を冷却せしめければ、今や、背後に、皇帝の有力なる保護を有せざる法王は、その大勢力を維持する能はざりき。

宗教の腐敗

第十四世紀には、地震・黑死病・蝗害等、諸種の災害・頻頻として起り、人人、皆宗教に頼りて、安心を求めんとする情、甚だ切なるに、法王以下僧侶等、慈悲・教化を怠りて、腐敗墮落を極め、一も、これに滿足を與ふるものなかりき。殊に、

法王の像　フランス國シャルトル府大伽藍にある石像にて第十三世紀の作

一三〇九年、法王のアビニョンに移されてより（七三頁參照）全くフランス王の機關たること、六十八年、その間、また、ローマにも、法王を擁立するものありて、二法王、並び立ち、信徒をして、いよいよ、その適從する所に迷はしめぬ。

わが南北朝時代、後村上天皇の御代

帝權の不振

法王と皇帝とは、共にキリスト教的大統一の理想の中心なれば、一方衰へて、他の獨り盛んなるを許さず。大空位時代の後、一二七三年、ハプスブルグ伯ルドルフ(Rudolf I.)、選立せられて、ドイツ王となり、オーストリア(Austria(Oesterreich I.))、及び、その附近の地を取りて、自家強大の基を開けり。かくて、ドイツ王は、また、昔日の大理想なく、概ねイタリアを放棄し、ドイツ一般の利益すら、これを省みず、たゞ、家門の繁榮を計ることにのみ汲汲たりき。

七選擧侯

されば、諸侯は、ますます跋扈し、中にも、マインツ・トリエル・ケルンの三大僧正、ボヘミア王・サクソニア公・ファルツ伯・ブランデンブルグ邊境伯の七大諸侯、最も權力を逞くし、つひに國王選擧の常置委員の如き姿となりぬ。ボヘミア家のカロロ四世帝に至り、一三五六年、黄金文書を發布して、これ等七大諸侯を選擧侯と稱し、その權利を確認したり。

Mayence(Mainz F.) Treves(Trier F.) Cologne(Köln F.) Bohemia Saxony Count Palatinate(Pfalzgraf F.) Brandenburg Marksgraf Elector Golden Bull

宗教改革の企圖

一四一〇年、カロロ四世の子シギスモンド立ちて、やや高尚なる理想を抱き、各國の輿論が、切に教會の統一を望めるを見て、一四一四年、コンスタンツに宗教會議を開き、同時に對立せる三法王を、悉く廢し、新に一人の法王を立てて、ローマに居らしめき。然れども、教會内部の積弊は、洗除せられず、法權は、益衰運に向へり。

Sigismund Constance(Constanz F.)

宗教改革論者フス焚殺せらるる圖　一四一七年頃成りたる圖畫の年代記。圖中フスの戴けるは邪宗徒の冠と稱するものなり

これよりさき、宗弊を慨くもの、漸く起り、第十四世紀の末に、イギリスにウィクリフ(Wycliffe)一三八四年死の改革説出で、後、ボヘミアのフス(Huss)、その説を祖述し、革新の必要を痛論せしが、コンスタンツ宗教會議は、異端者として、焚刑に處したり。

中古末期の風潮

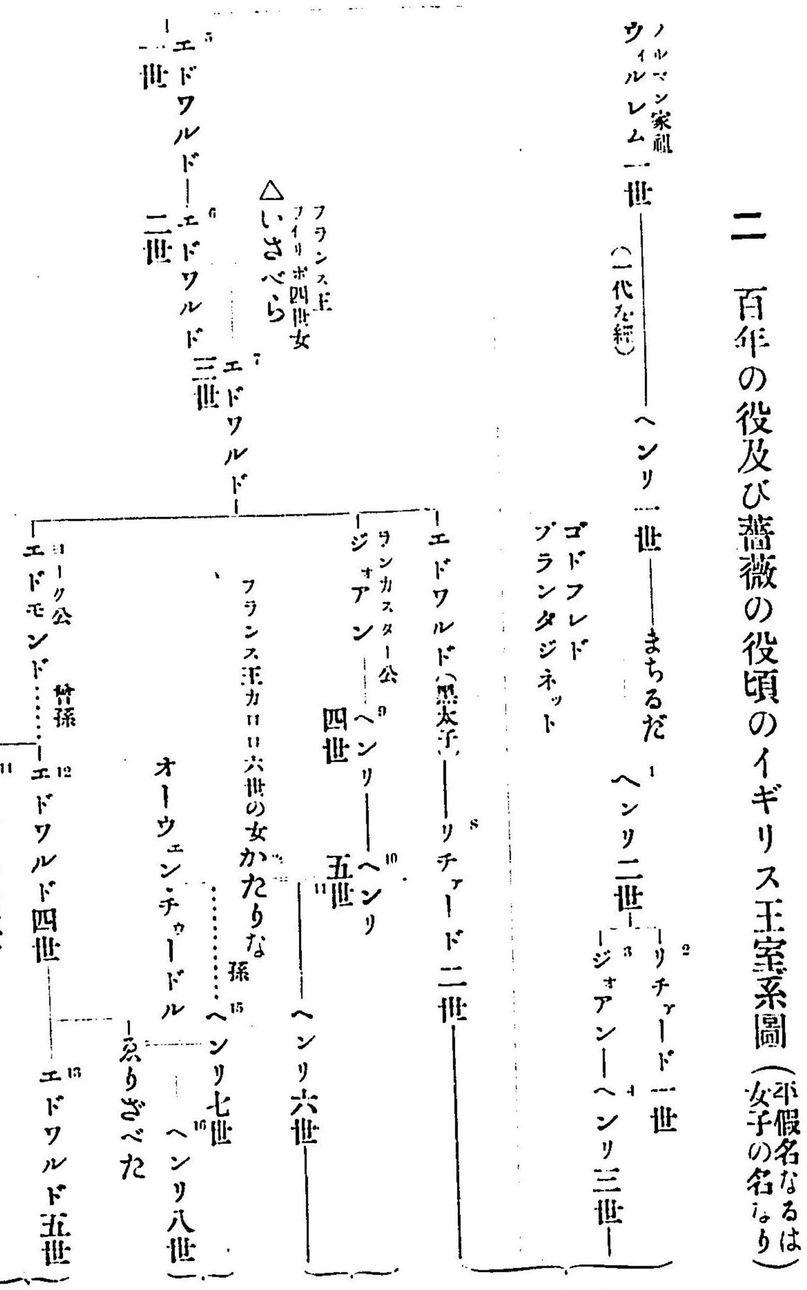
百年の役の原因

第二章　各國の中央集權

法王、及び、神聖ローマ皇帝が理想としたる世界統一主義（Centralization）は、中世の末に至りて、全く衰頽し、各國には、中央集權・國家主義起り、封建制度、破壞せられたり。

フランスにては、王權、稍發達せる時に當り、一三二八年、カペー朝（七二頁參照）絶えて、一族バロア（Valois）家のフィリポ六世立ちぬ。イギリス王エドワルド（Edward）三世、その母が、フィリポ四世の女なるを口實とし、フランスの王位を要求せり。然れども、フランスの國民は、他國の王を戴くを欲せず、かつ、かねて、今のベルギー（Belgium）地方なるフランドル製絨の原料たる羊毛輸入の利を、イギリスより奪はんとしければ、ここに、兩國の間に、戰端開けたり。これを百年の役（Hundred Years War）一三三九―一四五三の始めとす。

二　百年の役及び薔薇の役頃のイギリス王室系圖（平假名なるは女子の名なり）



この頃醍醐の亂あり

百年の役の顚末

ジアンヌ・ダルク

その圍を破りてカロロ七世を王位に即かしめしオルレアン市にある紀念像

薔薇の役

初め、イギリスは、フランドルと同盟して、フランスの海軍を破り、つぎて、クレシー（Crécy）一三四六に勝ち、一旦、和睦成りしが、その後、再び大擧して、ポアチエー（Poitiers）一三五六・アゼンクール（Azincourt）一四一五等の諸戰に、大勝を得、フランスの國運も、旦夕に迫りき。たまたまジアンヌ・ダルク（Jeanne Darc）といふ一少奇女、自ら神託を得たりと信じて、義を唱へ、士氣、ために大に振ひ、連りにイギリス軍を破り、遂に、悉く、これを國外に驅逐せり。

百年役の後、イギリスには、ランカスター（Lancaster）・ヨーク（York）兩家の王位爭ありて、內亂、三十年に及べり。これを薔薇（War of Roses）の役——四五九—四八五といふ。ヨーク家、一時勝ちて、王位を占めしが、數代の後、ランカスターの支族チューダル（Tudor）家の

イギリスの中央集權

ヘンリ七世（一四八五—五〇九）兩系を合一して、國内を一統せり。

薔薇の役のために、諸侯、多く斃れ、その所領、王室に歸して、王權の伸張を助けたりしに、ヘンリ七世は、ますます、内帑を富ましし、嚴に諸侯の蓄兵を禁じ、星室廳（Court of Star Chamber）を設けて、諸侯を監督し、巧みに、議會召集を避けて、專制政治を斷行したり。

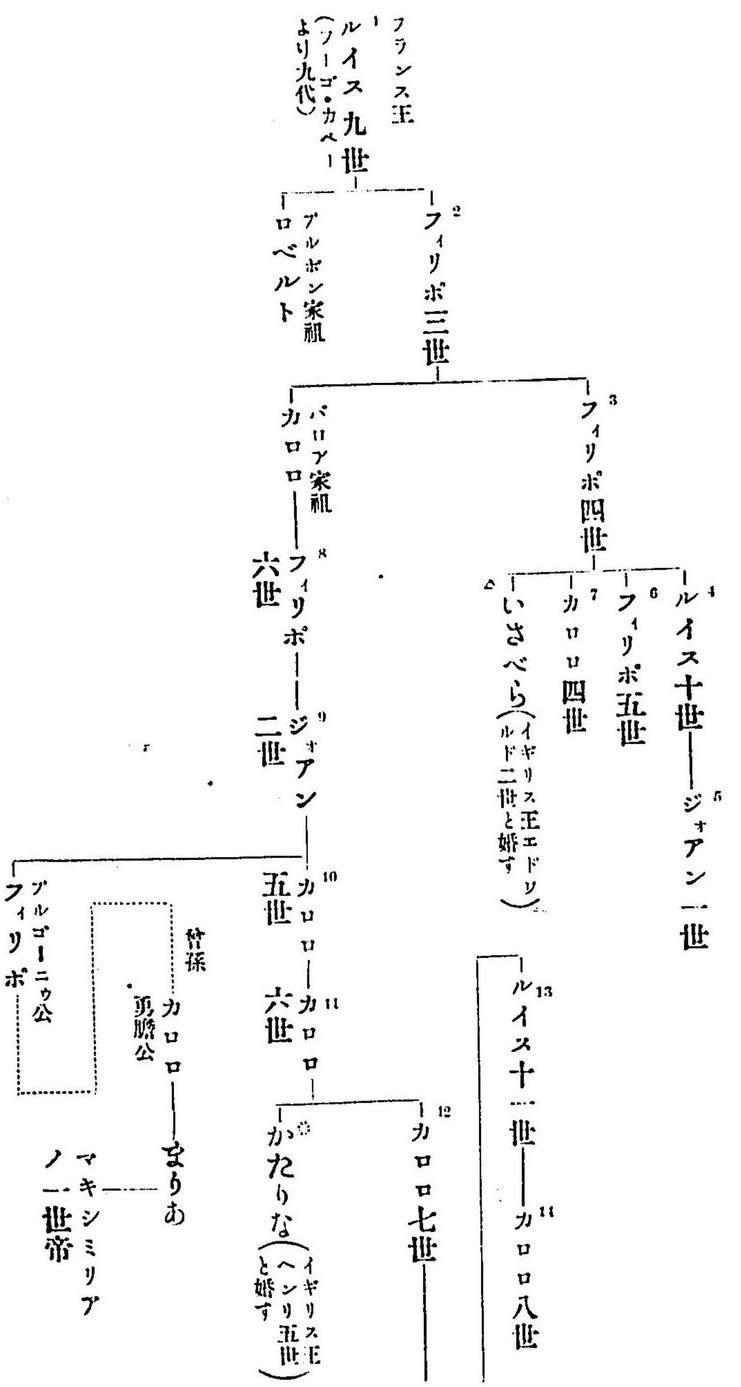
フランスの中央集權

フランスにては、カロロ七世（一四二二—四六一）百年役の末期に、始めて、常備軍を作り、ますます、諸侯を抑へて、王權を擴張したり。ルイス十一世（一四六一—八三）つぎて即位するに及び、巧みに、諸侯の軋轢・自滅を謀り、または、その男系の斷絶に乘じて、所領を沒收し、殆んど、國内を統一せり。

ブルゴーニュ公の大望

時に、ブルゴーニュ（Burgundy（Bourgogne））公カロロ、今のオランダ・ベルギー（Holland Belgium）、及び、ドイツ西南部を併せ、陰に獨立王國を建つるの志ありて、常にルイスの政略に反對せり。然るに、カロロは、スウィス（Swiss）人と戰

三　百年の役及びその前後のフランス王室系圖



前年堀越御所亡ぶ

武士演武の圖

フランスの統一完成

イスパニアの中央集權

ひ、一四七七年、遂にナンシーに敗死し、遺領は、女婿マキシミリアノ一世帝(Maximilian)(一四九三―一五一九)に歸したり。ルイス、よりて、マキシミリアノと戰ひ、ブルゴーニュ本土、及び、フランドル以南を收めて和しぬ。バロア(Valois)對ハプスブルグ(Hapsburg)の爭、これより起る。ルイスの子カロロ八世に至り、ブルターニュ(Bretagne)公の女を后とし、以て、その領土を併せければ、全國、よく統一し、王權、確立したり。

イスパニアにては、カスチリヤ(六八頁參照)漸く大となり、一四六九年、女王イサベラ、アラゴン王フェルヂナンドと婚し、兩國を合併して、一王國となし、つ

きて、一四九二年、南部に存せる回教國グラナダ(Granada)を滅して、

イスパニアを統一し、漸く貴族・僧侶を制して、王權を擴張せり。

ポルトガルの中央集權

ポルトガルは、もと、カスチリヤに屬せしが、第十一世紀の末に獨立し、次第に大諸侯の領土を奪ひて、王權を固くせり。

ドイツの中央集權運動

ドイツにては、一四三七年、シギスモンド帝（八五頁參照）死してより、ハプスブルグ家、代代、ドイツに君臨せしが、國内の紛擾甚しかりき。マキシミリアノ一世の時、マインツの大僧正ベルトルド等、共和的中央集權制を立てて、これを救濟せんと圖り、一時、やや成功せんとせしが、つひに失敗に終れり。

第三章　兵制及び政略の一變　スウィスの獨立

フス信徒の亂

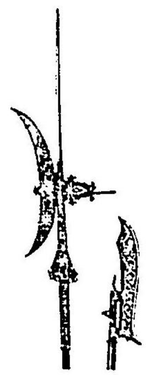
上古及び中古の兵制と戰術と

古代のギリシア・ローマの兵制は、歩兵を以て、軍の主部とし、戰術も、大に發達せり。中古の初め、フン、及び、サラセンの影響として、西ヨーロッパは、漸く騎兵を尚び、封建制度の成るや、武士、即ち重甲を着たる騎兵、軍の主部となり、その突貫によりて、專ら勝敗を決したれば、戰術は、大に退歩したり。

スウィスの兵制と戰術と

ハレバルド實物寫生

然るに、強健にして、獨立心強きスウィス土民は、長鎗とハレバルド（Hallebarde）とを執れる密聚隊を作りて、武士の突貫に當り、また、山嶽多きその地理を利用し、巧みに、敵の弱點に乘ぜしかば、ここに、歩兵と戰術との利、再び發揮せられたり。



スウィスの獨立

スウィス人は、一三一五年、モルガルテン（Morgarten）に勝ちて、領主ハプスブルグ家の羈絆を脱し、一三八六年、センパハ（Sempach）に、再び、これ

フス戰役

を破りて、獨立を全くし、なほ、一四七六年、及び、その翌年に、強盛なるブルゴーニュ（八九頁參照）の軍に勝ち、勢威、内外に振へり。

一四一五年、ボヘミア（Bohemia, Böhmen）の宗教改革者フスの刑せらるるや、（八五頁參照）その信徒等、これを憤りて、帝命を奉ぜず、盲目の名將チスカに率ゐられ、車を聯ねて、車堡（ワーゲンブルク Wagenburg）を作り、出沒進退、意表に出でて、忽ち征討の武士軍を擊退し、なほ四隣に寇しければ、皇帝も、一四三三年、つひに信仰の自由を許して、これと和しぬ。

チスカの像
當時の銅版畫
チスカは貴族の家に生れ幼にして左眼を失ふ後流矢右眼に中りて盲目となる附後地理敵情の報告を得て作戰計劃を立て親ら無敵同胞隊を率ゐ要處を衝きて勝を決せり

かくの如く、歩戰の利、ますます、明らかになりければ、各國の君主は、その封建制度打破に便なるを思ひ、或はスウィス人を雇ひ入れ、或は領内の民を訓練して、これを用ゐ、傭兵の制、ここに起り、

傭兵と常備軍と

各國、爭ひて常備軍を置けり。たまたま、第十四世紀に、サラセン人より、火器の傳來ありて、更に歩戰の發達を助け、重甲を着たる武士も、その根據とせる城堡も、これに堪ゆる能はず、封建制度は、自然に破壞せられぬ。

火器の使用

政略の一變

中古の末に當りて、諸王侯は、なるべく、實力を費さずして、その目的を貫くことを力め、權謀術數を弄し、合從連衡の策略を用ゐたり。されば、外國に公使を常置して、その内情を探り、これに對する政略の助けとすることも、また、この頃より始まりたり。

文藝復興の原因

第四章　文藝復興（Renaissance）　活版術の發明

中古、西ヨーロッパの思想は、宗教以外に出でず、建築・彫刻・繪畫の如きも、みな、宗教の精神を帶びざるなし。然るに、十字

軍の結果は、知見を擴め、迷信を破りて、世運を一轉せしめ、所謂文藝復興の機運開けぬ。

第十四五世紀西ヨーロッパ男女の風俗畫

文藝復興の起源

初め、イタリアの諸市府は、十字軍により、東方との通商を獨占して、頗る繁榮を極めしが、市制の改良に資せんため、第十二世紀以來、ローマ法の研究、始まり、延きて、古代文學の研究を誘ひ、國文學の創作も起れり。殊に、フィレンツェには、ダンテ（Dante 一三二一年死）ペトラルカ（Petrarca 一三七四年死）ボカチオ（Boccaccio 一三七五年死）等輩出し、共に文藝復興の先達者たりき。

イタリアに於ける古學の隆盛

オスマンリトルコ（Ottoman Turks, Osmanli Turks）の、東ヨーロッパを壓迫するや、ギリシア帝國の學者、難を避けて、陸續、西方に移り、その蘊蓄する所を傳へければ、西ヨーロッパの文運、蔚然として興り、ギリシア・ロ

ーマ古文學の考究、及び、古書の探求を力め、古人の精神を覺らんとする人道派（Humanism）、ますます盛んになりて、漸くヨーロッパの諸國に普及し、ドイツにロイヒリン（Reuchlin）・エラスムス（Erasmus）、フランスにエスチエンヌ（Estienne）、イギリスにトーマス・モーア（Thomas More）の如き名士出で、つひに、古學をして高等教育の必要學科とならしめぬ。すべて、人道派（Humanist）の學者は、宗教の束縛を脱し、自由活潑の精神を有せしを以て、常に當時の宗弊を嘲罵せり。

人道派の隆盛

第十五世紀中頃の學者の書齋
ブルゴーニュ公の書記ジオアン・ミーロ（Jean Miclot）がその書齋にて方に著書中の所を示す原畫はパリー圖書館内中古肉筆文書中にあり

藝術の復興

古學の復興とともに、建築・彫刻・繪畫等の藝術も、大に發達し、特にイタリアには、建築にブラマンテ（Bramante）、繪畫にラファエロ（Raphael（Raffaello））、彫

その發達

ミケランジェロ・ラファエロは共にわが東山時代に生る

活版術の發明

刻及び繪畫に、ミケランジェロ(Michelangelo)など、非凡の大家出でたり。

從來、書籍は、一一、これを謄寫せしものなれば、その不便甚しく、かつ、頗る高價なりしが、第十五世紀の中頃に至り、ドイツ人グーテンベルヒ(Gutenberg)、活版術を發明し、これと同時に、簡易なる製紙法も起りしかば、これより、書籍の發行・頒布、大に簡便となり、智識普及の大原因となりたり。

第五章　地理上の發見　ポルトガル　イスパニアの植民策

東方遠征の氣運

十字軍は、サラセンの地理上の智識を、西方に媒介して、大に冒險的精神を鼓舞せしかば、或は商利のために、或は弘教のために、東方に旅行するもの、漸く多く、ことに、名高き東方旅行家ベネチア人マルコ=ポーロ(Marco Polo)一二五四―一三二四の東方見聞談、公

倭寇も亦漸く盛んなり

アフリカ迂廻インド航路の發見

にせられしより、西人の、利を東方に探らんとする念、ますます盛んになれり。　されど、陸路は、トルコ人勃興して、これを梗塞せしかば、第十三世紀の中頃に、支那より傳はれる磁針を應用して、途を海上に求め、第十五世紀の末に至り、ポルトガル人の力によりて、つひに、この大目的を達したり。

第十五世紀の初め、ポルトガルの王子ヘンリ、しきりに、アフリカ西岸を探檢せしめたり。　爾後、同王室は、ますます、ヘンリの遺志遂行を力めしかば、一四八六年、バルトロメオ=ヂアズ(Bartolommeo Diaz)、グード=ホープ岬(Cape of Good Hope)に達し、一四九八年、バスコ=ダ=ガマ(Vasco da Gama)は、つひに、海路、インドに達することを得たり。

アメリカ發見

この航路の、未だ明かならざりし時に當り、西方に航するは、反りて、東方に至る捷徑なりと說けるものあり。　ジェノバの人コロンブス(Columbus)、この說を信じ、遂にイスパニア王フェルヂナ(Ferdinand)

ンド、及び、王后イサベラ(Isabella)の賛助を得て、太西洋を西航し、一四九二年、始めて、西インドの一島に達したり。爾後、コロンブスは、なほ、三回の航海を試み、その他の探檢者も、相つぎて、西世界に航し、つひに、一大陸を發見せり。これをアメリカといふは、ポルトガル王の命を受けて、南アメリカを探檢したるアメリゴ=ベスプッチ(Amerigo Vespucci)の名に取りたるなり。

發見時代の船
當時の木版畫

ポルトガル人の東漸

ポルトガル人は、新地を發見するとともに、居留地を設け、遂に武力を用ゐて、これを略するを常とせり。一五〇九年、アルブケルケ(Albuquerque)が、インド總督となるや、ゴア(Goa)を占領して、ここに總督府を置き、マラカ(Malacca)を略し、マライ(Malay)群島の諸處を攻め取

コロンブスの、說行はれざるを憤る圖

本圖は、イタリア人ニコロ＝バラビニ(Niccolo Barabini)の筆なり。

コロンブスは、西方に向ひて航するは、インドに至る最捷徑なりとの說を信じ、その實行をポルトガル王ジョアンに勸む。王は、その說を聽きながら、コロンブスを用ゐずして、その功を奪はんとす。コロンブス怒り、去りて、イスパニアに行き、その王フェルヂナンド、及び、王后イサベラに勸めたり。然るに、その提案審議の命を受けたる學者等、これを空想なりとして排斥しければ、コロンブス、且憤り、且落膽し、將にフランスに赴かんとせしが、遂にイサベラに用ゐられて、その初志を貫くことを得たり。本圖は、即ち、學者の會議終了後、コロンブスが、その說の斥けられたるを憤慨し、傍人、これを嘲笑せる所なり。

後奈良天皇天文十二年

ポルトガル・イスパニア兩國人の西漸

世界一週の始め

りき。爾後、益〻東進して、つひに支那に通じ、マカオ(澳門Macao)に據り、一五四三年には、始めて、我が國にまで來り、貿易の端を開けり。かく、ポルトガル人が、東洋との直接貿易を開始するに及び、イタリアの諸市府は、その利を失ひて、衰へゆけり。

一五〇〇年、ポルトガル人カブラル(Cabral)、ブラジル(Brazil)を發見して、その國の領地となせしが、アメリカ大陸の大部分は、イスパニアの版圖となれり。中にも、第十六世紀の初半に、コルテス(Cortez)のメキシコ(Mexico)と、ピサロ(Pizarro)の征服せるペルー(Peru)とは、その最も豐富なるものなりき。

一五一九年、ポルトガル人マガリャエンス(Magalhães)、イスパニア王の命を奉じ、南アメリカに航し、マジェラン(Magellan)(マガリャエンスの轉訛)海峽を通過して、太平洋に出で、一五二一年、フィリピン(Philippine)群島を發見せしが、不幸にして、土人に殺されぬ。されど、その部下は、遂にイ

ポルトガル・イスパニア兩國植民策の拙劣

ンド・アフリカを迂廻して、無事、歸國することを得、始めて、世界を一週し、地球球形說を實際に證明しけり。　これ、實に當時の人心を覺醒するに偉功ありたるものなり。

ポルトガル・イスパニア二國は、侵略に勇なれども、經綸に拙にして、濫りに、植民地の利得を吸取し、國人は、徒に、冒險投機の精神を高めて、實着なる業務に從ふを喜ばず、ために、反りて、本國、幷に屬地の產業の衰頽を來し、永く、その富强を擅にすること能はざりき。

第六章　オスマンリートルコの勃興

ラテン帝國滅亡

ニケーア皇帝七五頁參照は、銳意、ギリシア帝國の再興を圖り、一二六一年、遂にラテン帝國を滅して、やや、志を致したれども、勢、振はず、ベネチア等、なほ、その領土を保ち、ブルガリア(Bulgaria)モ

ギリシア帝國再興

オスマンリートルコの勃興

トルコの猛勢

ゴル種とスラフ種との雜種・セルビア(Serbia)スラフ種等も、また、バルカン(Balkan)半島に擴り、帝國は、ただ、都コンスタンチノプルの附近を有するに過ぎざりき。　この時に當り、オスマンリートルコ、勃興したり。

オスマンリートルコ(Osmanli Turk)は、もと、セルジュクトルコの配下に屬して、小アジアに居りしが、第十四紀の初め、酋長オスマン(Osman(Othman))、その强大の基を開けり。　その子ウルカン(Urkan)の時、小アジア全部を略し、憲法を編して、君權を固定し、また、虜にせるキリスト教徒の男兒の强壯なるものに、イスラム教の感化と、軍事教育とを授け、イニツェリ(Janizaries)と稱する勇猛無比の軍隊を作りければ、當時、未だ常備軍の設けなく、宗教熱心の衰へたる西ヨーロッパ人は、到底、その銳鋒に當り難かりき。

トルコは、その後、ヨーロッパに渡り、バジャシッド(Bajazid)一世、バルカン半島の大部を略し、一三九六年、ホンガリア王シギスモン

足利義政時代

ド神聖ローマ皇帝となれる人及び、ドイツ・フランスの武士の援軍を、ニコポリに破り、還りて、コンスタンチノプルを圍むこと、甚だ急なり。ギリシア皇帝、乃ち、救をチァガタイ國（七七頁参照）のチムール（Timur）に請へり。

チムルの業

テムチンの裔と稱するチムルは、第十四世紀の中頃、チァガタイ國を定め、つぎて、イルカンの國を滅し、キプチァク國を降し、また、インドの北部を略せしが、今や、ギリシア皇帝の請を容れて、バジァジッドを擊ち、一四〇二年、大に小アジアのアンゴラ（Angora）に破りて、これを虜にせり。チムルは、ほどなく、病死して、その大國、瓦解したり。

トルコの猖獗ギリシア帝國滅亡

その後、トルコ、再び勢を得て、東ヨーロッパを侵し、ムハメッド二世（一四五一―一四八一）は、一四五三年、遂にコンスタンチノプルを陷れ、ギリシア帝國を滅して、都をここに奠め、トラペズント帝國（七六頁参照）及び、クリムを併せ、また、悉くセルビア以下バルカン半島の地を平定し、ベネチアの所領を蠶食し、ポーランド（七六頁参照）の一部を略し、一四八〇年には、イタリアのオトラント（Otranto）をも陷れ、西ヨーロッパを震駭せしめたり。ギリシア帝國の東西に分れてより、千五

ムハメッド二世コンスタンチノプル陷落紀念牌

キプチァク滅亡

十八年にして亡びぬ。

キプチァク國も、チムルの死後、獨立せしが、勢、また振はず、かのルーリクの遠裔なるモスクバ大侯イバン（Ivan）三世、叛きて自立し、漸く強大となり、一四八〇年、大にキプチァクの軍を破りければ、キプチァクは、やがて、瓦解して亡びたり。一二三七年バツが、ロシアに入りしより、二百四十三年の後なり。

モスクバ大侯の大志

イバン三世は、ギリシア皇帝の女を娶り、同帝室の紋章なる雙頭鷲を襲用し、以て自ら繼承者に擬し、その甥イバン四世に至りて、始めて、全ロシアのツァール(Czar)と稱せり。ツァールは、ケーザル(Cesar)の轉訛にして、ローマ皇帝の繼承者の意を含めり。

ポーランドの強大

後六年わが南北兩朝の合一

ポーランドは、一三八六年、女王ヘドウィガ(Hedwig)、リトワニア(Lithuania, Lituanen F.)大公ヤゲロ(Jagello)と婚して、これと合同せり。爾後、約二百年間、ヤゲロ家、王位を保ち、ロシアを蠶食し、ドイツ武士團より、リボニア(Livonia, Livland F.)を奪ひ、また、プロシア(Prussia, Preussen F.)公國の宗主權を得たり。これをポーランド最盛の時代とす。

各國逐鹿の中心地

第七章　イタリアの役(Italian War)

西ヨーロッパ諸國は、中央集權の實、擧がり、國基、漸く鞏固となるや、ますます、縱横の術策を弄して、しきりに、侵略運動に

着手し、イタリアは、その逐鹿の中心地となりぬ。

イタリアの形勢

イタリアは、スタウフェン家斷絶(六七頁參照)以後、群侯・市府、割據し、第十五世紀には、その大なるもの五あり。ベネチア・ミラノ・フィレンツェ法王領、及び、ナポリ王國、これなり。文學・美術の奬勵を以て名高きフィレンツェのメヂチ(Medici)家は、この間に處して、縱横の外交術を逞くし、よく五國間の均勢を保ちき。

イタリア役の發端

一四九四年、フランス王カロロ八世(八九頁參照)イタリアに侵入し、ナポリ王國を取らんとせり。イタリアの諸國、その勢の盛んなるを忌み、ドイツのマキシミリアノ一世(Maximilian)帝、及び、イスパニア王フェルヂナンド五世と結びて、これに抗しければ、カロロは、急に兵を班せり。既にして、カロロの子ルイス十二世立ち、イスパニアと同盟して、ミラノ・ナポリを取りしが、ナポリは、つひに、イスパニアの手に落ちたり。

時の法王ユリウス二世(Julius)、豪邁にして機略に富み、イタリアに覇たらんと欲し、まづ、皇帝、及び、フランス・イスパニアと結びて、ベネチアを攻めたり。ベネチア、大に苦みしが、得意の外交術を振ひ、法王、及び、イスパニアに地を割き、以て、その同盟を脱せしめき。

傭兵
一五五九年印刷木版

つぎて、法王は、ベネチア・イスパニア・イギリス、及び、皇帝と同盟を結び、スウィス人をして、フランス人を、ミラノより逐はしめ、また、フィレンツェを保護國となしたり。一五一三年、ユリウス死し、レオ十世繼ぎ、また、その政略を守れり。

フランスの勝利

一五一五年、フランス王フランシス一世(Francis(François 1))、立ち、ベネチアと同盟し、急にイタリアに入りて、法王、及び、スウィスの軍を破り、ミラノを復して、法王と和しぬ。翌年、イスパニア王フェルヂ

ナンド死しければ、マキシミリアノ、獨力にて、フランスと爭ふことの難きを視、また、これと和し、ミラノは、全くフランスに歸したり。これより、フランシス、勢を得て、ドイツの王位を窺へり。

中古史摘要

西洋史の中古期は、凡そ第四世紀の末より、第十六世紀の初めに至る。即ち、わが仁德天皇の御代の末、支那東晉の末より、足利義稙將軍の頃、支那明朝の武宗の頃までなり。

その初め、ゲルマニ諸族、東・西ローマの領土に侵入し、西ローマ、つひに亡びて、蠻族、處處に國を建てたり。東ローマは、舊ローマの大統一恢復の志、止まざりしが、東には、ペルシアの掣肘あり、西には、半獨立の法王と、强盛なるフランクとの

結托成りて、この理想の實現を防止したり。

フランクは、曾て、サラセンを破り、キリスト教のために、大功ありしが、その王ピピン・カロロ、共に法王を保護し、カロロは、遂に、法王より、西ローマの帝冠を受け、ここに、東・西ヨーロッパは、政教、共に分離し、文化も、また、各、特異の發展を見たり。

カロロ大帝は、西ローマの後を襲ひて、政教の統一を計り、異教徒なるアワール・サクス・サラセンを擊ち、また、統一的政法を施けり。その死後、帝國分裂せしが、ドイツ王オット一世、神聖ローマ帝國を興し、カロロの遺志を繼ぎ、キリスト教の普及せる宇内統一の大帝國となさんとし、法王を以て、その羽翼となしぬ。

されば、オット一世の子オット二世が、ギリシア皇女テオブァノ Theophano を娶りし如き、法王インノケント三世が、第四十字軍の際、ギ

リシア帝國を、その法權に服せしめんとせる如き、皆、中古期を一貫せる大統一の精神の發揮に外ならざりしなり。

この大統一の中心なる皇帝と法王とは、輔車唇齒の關係あるに、その統一事業の、やや行はれんとするや、一は、他に屈するを欲せず、衝突・爭鬪、起り、互に精力を耗盡し、帝權、まづ衰へて、法權、また振はずなりぬ。同時に、ローマ的統一の精神に對して、ゲルマニ的割據の精神、また存在し、各地の諸侯、各、その獨立を計り、イギリス・フランスなどには、早くより、國家主義の萠芽ありて、皇帝・法王に服せざりき。

中古の人心は、宗教と封建制度との束縛に依りて、甚しく萎縮せり。この宗教熱心と、好鬪的精神とは、十字軍の運動を起さしめぬ。十字軍は、一時、宗教心を昂め、法權を強くし、武士道を發揮せしめたるが、その最後の結果は、反りて、宗教

熱を放散せしめ、智識を擴め、精神を濶大にし、また、交通の發達、需用の增加により、商業を盛んにし、市府の繁昌を促し、地理上の探檢・發明を續出し、ために、經濟上に大發展を誘致し、この發展の妨害たる封建制度は、一般に厭惡せられたり。

たまたま、トルコの强大は、その君權の强大なるに基くこと、一般に認められ、從來、國家主義を抱ける諸國の君主は、これに刺戟せられて、一面、人民と結托し、一面、兵制の一變により、傭兵制を採り、また、武士道の廢頽と共に、權謀術數を弄して、諸侯を抑壓し、盛んに中央集權を行へり。

東方には、サラセン起りて、ペルシアを滅し、ギリシア帝國を蠶食し、廣大の領土を拓きたるが、後、分裂して衰へ、セルジュクトルコ、これを征服したれども、また、分裂して、十字軍の侵攻に苦めり。ギリシア帝國は、第四十字軍のために、一旦、亡び、その北なるロシア・ポーランドなども、一時、盛んなりしが、いづれも內亂あり、分裂して振はずなりぬ。

かく、東方に、固定せる强國なきに際し、モンゴルの來侵ありて、その向ふ所、敵なく、ロシアは、久しく、その配下に歸せり。

既にして、小アジアに、同じくモンゴル種の、オスマンリトルコ起り、再興せるギリシア帝國を苦め、終にこれを滅し、ベネチア等の領土を奪ひ、その勢威、全ヨーロッパを壓せり。

第三部　近古史

第一篇　イスパニア・フランス對抗時代

第一章　宗教改革 Reformation

ドイツの形勢

ドイツには、統一的の勢力なきを以て、法王、及び、寺院の聚歛を蒙ること、最も多く、輿論は、これに平かならざりき。マルチンルーテル、この際に出で、夙に教風の頽廢を痛恨せしが、法王レオ十世が、免罪符 Indulgence を賣らしむるを見るに及び、一五一七年、その事の非理なるを辨じ、さらに、大に教會の革新を唱へければ、法王は、一五二〇年、遂にこれを破門したり。

ルーテルの改革首唱

後四年後柏原天皇本願寺の獻資によりて即位の式を行はる

この前年、マキシミリアノ一世帝死し、その孫イスパニア王カロロ一世 Char (Carlos 之)、ドイツなるハプスブルグの家領を相續し、ま

カロロ五世の大版圖

た、ドイツ王の候補者として、フランス王フランシス一世と競爭し、これに勝ちて、カロロ五世 (Karl 5) と稱し、オーストリア・ネーデルランド・ドイツ西南部・ナポリ・シチリア・イスパニア、及び、その海外の屬領を併せ領し、なほ、北イタリアをフランスより奪はんことを期せり。

カロロは、對フランス政略のため、法王と提携するを利としければ、一五二一年、ウォルムス Worms に國會を開き、ルーテルを審問せしが、ルーテル、屈せざりしかば、乃ち勅令を

後四年北條氏綱江戸城を取る

カロロ對ルーテル

免罪符賣買の圖　當時の木版畫

ルーテル二十八歳の時の肖像僧侶服着用

この頃一向一揆法華一揆等あり

新教の過激分子

新教の教會組織確立

發し、これを異端者として排斥せり。ルーテルは、領主サクソニア公フレデリキの庇護を受け、暫くワルトブルグ城内に隠れて、聖書の飜譯をなしぬ。

當時、イスパニアとフランスとの紛爭ありしため、新教は、皇帝の抑壓を免るること、八年に及べり。この間、過激の説を唱ふる再洗禮派起り、封建の盛時を夢みる武士、及び、領主の壓制に苦める農民等、また、これに乘じて、一揆を起したるが、いづれも、大諸侯に鎮壓せられき。

ルーテルは、再び起ちて、是等過激極端の行爲を排擊し、メランヒトンの徒と共に、漸次、新教の教會組織を確立し、學校

イスパニア・フランスの交戰

カロロ五世三十八歳の時の肖像　一五三八年出版銅版畫

スパイエル國會

を起して、少年有爲の士を養成し、以て、その弘通をはかりければ、北ドイツの諸侯は、概ね、これに歸依したり。

第二章　カロロ五世の雄圖　シュマルカルデンの役

カロロ五世は、イタリア北部なるロンバルヂア地方を得んとし、フランス王フランシスと、しきりに、干戈を交へ、一五二九年に至り、その目的を達しき。同年、カロロは、國會をスパイエルに開き、ウルムス勅令の厲行を決議せしめぬ。新教徒は、大にこの決議に抗論せしかば、こ

トルコの西侵

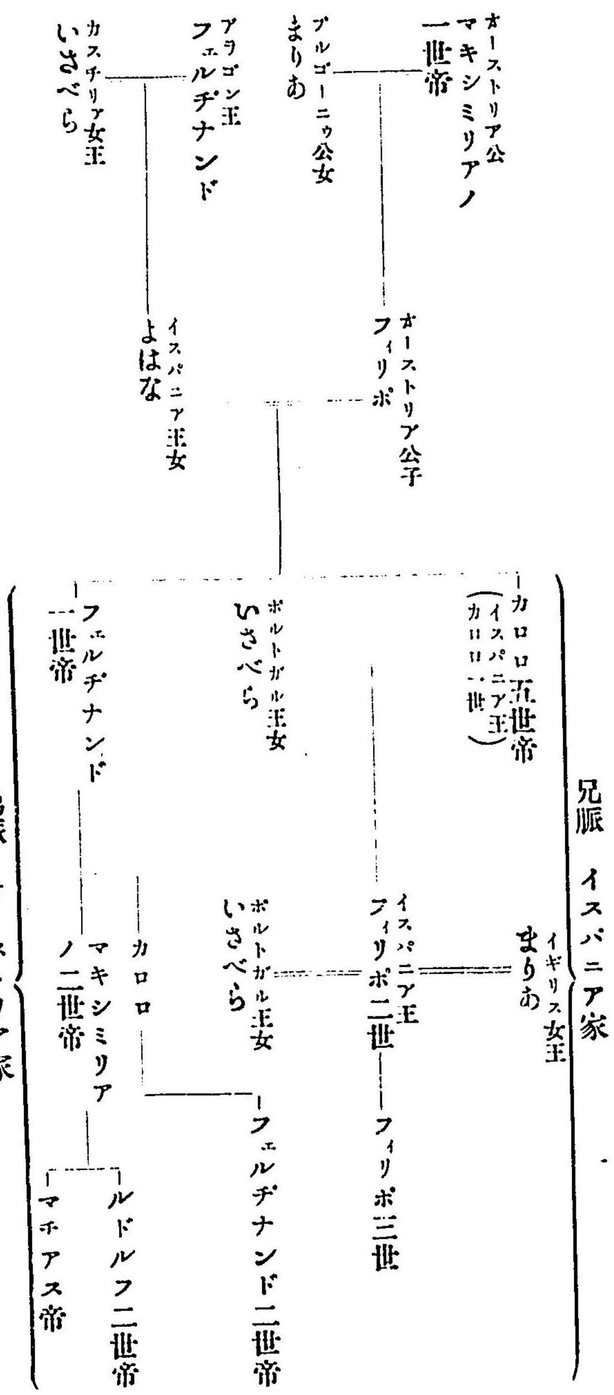
れより、新教徒を目して、プロテスタント(Protestants)の抗論者といふ。

この頃、トルコの國威、益〻張り、(一〇三頁照)その帝スリマン二世(Suleiman=Solyman)、フランス王と結托して、ホンガリアを侵せり。カロロ五世は、弟フェルヂナンドを助けて、ホンガリア王となしめたれども、スリマン、その地の大半を取り、一五二九年、更に大擧して、オーストリアを侵し、都ウィーン(Vienna(Wien))を圍めり。ここに於て、ドイツの新舊兩教徒、相一致して、皇帝を助け、これを擊退したり。

アウグスブルグ信條

かかる内外の事情の下に、ドイツの新教は、その勢を保ちしが、一五三〇年に開きたるアウグスブルグ(Augsburg)の國會は、メランヒトンが、起草して提出せる信條(Augsburger Confession)を容れず、かへりて、新教排斥を議決し、形勢、頗る非なりしかば、新教徒は、自衛のため、サクソニア公フレデリキを首領として、シュマルカルデン同(League of Schmalkalden)

四　ハプスブルグ家分脈系圖



盟を組織せり。

ツウィングリ派の挫折

初め、スウィスには、ツウィングリ(Zwingli)が首唱したる新教、行はれしが、ツウィングリは、國人を傭兵として、外國に貸すの非理なることを攻撃せしかば、黨爭の極、内亂となり、一五三一年、ツウィングリ、戰死して、この派、また挫折せり。

ニッルンベルヒの宗教和議

然るに、法王、及び、舊教を奉ずるドイツ諸侯等は、帝權の增大を恐るること甚しく、フランス王は、機に乘じて、常にイタリアに志を伸さんとし、スリマンは、大舉して、オーストリアに侵入しければ、帝も、内外の多事なるに苦み、一五三二年、新教徒と、ニッルンベルヒ(Nuremberg)の宗教和議を結び、次回の宗教大會まで、その宣布の自由を許したり。

イスパニア・フランスの和

かくて、帝は、兵力を集めて、スリマンを退け、また、イギリス王ヘンリ八世と結びて、フランシスと戰ひ、互に勝敗ありし

シュマルカルデンの役

が、一五四四年、和成り、多年紛爭の終局を見たり。

これより、帝は、兵力を以て、新教徒壓伏に從ひ、シュマルカルデン同盟の軍を破りて、一五四七年、その領袖サクソニア公フレデリキを虜にし、サクソニア家支流の出なるモリスに、フレデリキの領土を與へたり。

然るに、法王は、帝の方針を喜ばず、モリス(Maurice(Moritz F))も、帝權の過大を恐れて、密に新教徒に通じ、また、フランスと結び、つひに、帝を襲ひて、これを破れり。

後奈良天皇の弘治元年嚴島の戰あり

アウグスブルグ宗教和議

一五五五年、アウグスブルグ宗教和議成り、帝も、つひに、アウグスブルグ信條を奉ずる新教徒の信仰を許し、新舊兩派の同權を公認し、つぎて、弟フェルヂナンドを皇帝に選立せしめて、ドイツ内の領土を授け、また、子フィリポ二世に、イスパニアの王位を讓りて、ネーデルランド・フランシュコンテ(Netherland(Nederland オ) Franche Comte 今のフランス東北の地)ナポリ・ロンバルヂア・イスパニア、及び、その海外の屬地を、併せ領せしめたり。ここに於て、ハプスブルグ家は、兩派に分れぬ。

ハプスブルグ兩派に分る

第二篇　イスパニア强大時代

第一章　宗教改革の反動 (Counter-Reformation)

ルーテル派新教の隆盛

アウグスブルグ宗教和議後、新教の勢、益盛んになり、第十六世紀の末葉には、ドイツ國の大半、及び、デンマルク・スウェーデンに弘通し、ポーランド・ホンガリア・イスパニア・イタリア等にも及べり。

カルビン派新教の弘通

ルーテル派の四方に弘通せると同時に、カルビン(Calvin)が創唱せる新教も、また、漸くスウィス・オランダ・スコットランド(Scotland)・フランス、及び、ドイツ自由市(帝國直參の市)の間に流傳したり。

宗教改革反動の原因

かく、新教の勢、盛んなりしかど、その各派、相和せず、あまりに、儀式・典禮を斥けたると、法王以下僧侶が、大に品行を慎み、教義を修正し、漸く民望を恢復せるとにより、宗教改革の反動、大に起りぬ。殊に、イスパニア人ロヨラ Loyola が、新教に對して、法王の威權を維持せんと欲し、一五四〇年、エスイタ團體を組織し、人材を教育して、盛んに各地に弘教せると、イスパニア王フィリポ二世（一五五六―一五九八）が、舊教を擁護して、ヨーロッパに覇たらんとする大經綸とは、舊教再興に最も力ありき。

ロヨラの像 紀念牌

イスパニアの強大

當時、イスパニアは、シチリア・ナポリ・ロンバルヂアの外、繁盛無比のネーデルランド、無盡の富源たるアメリカの植民地等を有し、以て、盛んに傭兵を蓄へ、當代の名士、その將帥たり。かくて、フィリポ二世は、フランスと戰ひて、これを破り、一五七一年には、レパントの海戰 Lepanto に、トルコ海軍を粉碎し、つぎて、また、ポルトガルの王位を兼ね、その海外の屬領をも併せければ、イスパニアの強盛、一世に冠たりき。然るに、オランダ Holland の離畔と、イギリス・フランスの發達とは、終にイスパニアをして、獨り恣なることを得ざらしめたり。

明年信長南蠻等を建つ

ネーデルランドの情態

離畔の原因

第二章　オランダの獨立及びその隆盛

ネーデルランド（一一九頁參照）には、新教、多く行はれ、夙に商業・製造、發達し、富榮を以て稱せられき。然るに、イスパニア王フィリポ二世は、專制主義の厲行を計り、新教を抑へて、舊教を強ひ、商業・製造の自由發達を妨害し、政令、苛酷を極めたり。こに於て、一五六七年以來、ネーデルランド人、叛旗を飜し、オ

南部の歸順
オランジュ公ウィルレム

北部七州同盟の獨立宣言

翌年本能寺の變あり

後四年秀吉の朝鮮征伐始まる

獨立運動の成功

り。北部の七州、乃ち同盟を結び、一五八一年に至り、その獨立を宣言し、ウィルレムを推して、世襲の總督とせり。これ、即ちオランダ共和國の始めなり。

その後、ウィルレムの子モリス、イギリス女王エリザベタ(Elisabeth)の助を得て、よくイスパニアと戰ひしかば、フィリポ(Parma)は、イギリス本國を擊たんとて、一五八八年、無敵艦隊(Invincible Armada)を遣り、かへりて、粉碎せられ、イスパニアの勢、大に挫折したり。翌年、イスパニアは、また、フランスと開戰し、益、オランダ人の乘ずる所となり、一六〇九年、遂にこれと休戰を約しければ、オランダは、事實に於て獨立せり。

オランダの隆盛

これより、オランダは、大に漁業・通商・航海・植民を力めたり。第十七世紀は、その極盛期にして、世界的商業に從事せる商船の四分三を有し、海運事業を獨占して、莫大の利を收めき。

オランダの東方經綸

當時、イスパニアは、ヨーロッパの事件に忙しくして、植民地の保護に遑なく、ポルトガル人は、東方、到る處に、土民を虐待して、その怨を買ひ居たり。オランダ人、これに乘じて、漸次、セイロン(Ceylon)以下インドに於けるポルトガル領を奪ひ、また、南洋諸島、及び、アフリカ南端に、植民地を開き、土民を虐遇せず、宗教を強ひず、バタビア(Batavia)府を根據として、盛んに、東洋貿易を營み、一時は、臺灣をも占領し、また、永くわが日本と通商せり。

オランダ人の始めて日本に至りしは慶長五年なり

オランダの西方經綸

オランダ人は、また、ブラジル(Brazil)の半を占領せしが、第十七世紀の中頃、代償金を得て、これをポルトガルに還したり。

第三章　イギリスの宗教改革

イギリス宗教改革の遠因

イギリス王ヘンリ八世（一五〇九―五四七）は、初め、宗教改革に反對し、法王より、信仰擁護者（Defender of the Faith）といふ稱號を得たり。されど、イギリスの君民は、法王が、種種の名義を以て、イギリスより、金錢財物を徵するを不快とせり。

その近因

既にして、王が、その后カタリナ(Catharine)を廢せんとするや、法王は、后の甥なるカロロ五世帝を憚りて、これを許さざりき。王、乃ち、イギリスの宗教裁判に於て、カタリナ離婚の事を決せしめ、一五三四年、議會、及び、僧侶の贊同を得、政教上、イギリスの主權者たることを宣言し、法王と全く分離したり。

イギリス教會の基礎

一五四七年、エドワルド六世立ち、教義の疑はしきものは、悉く新教の所說に從ひ、議會の協贊を得て、イギリス教會(Church of England)の基礎を定めたり。

女王エリザベタ

一五五三年、王の異母姉マリアつき(Mary (Maria))、舊教を固執して、新教徒を苦め、また、イスパニア王フィリポ二世と婚し、これを援けて、フランスと戰ひ、カレー(Calais)を失ひ、大に國民の非難を招けり。既にして、異母妹エリザベタ（一五五八―一六〇三）つき、明敏にして、善く人を用ゐ、また、イギリス教會を確立せり。

エリザベタ女王宮廷の服裝

兩女王の關係

初め、エリザベタの王位をつがんとせし時、舊教徒等、スコットランドの女王マリアを立てんとして、成らざりき。マリアは、舊教を固信して、新教を抑壓し、且、その

内行、修まらざりしを以て、遂に國人に逐はれて、エリザベタに依りしに、エリザベタは、久しく、これを幽し、後、舊教徒が、マリア擁立を圖るに及び、これを死刑に處したり。

エリザベタの經綸

シェクスピア肖像

エリザベタは、極力、イスパニア王フィリポ二世の政略に反對し、或はオランダの獨立を援け、或は西インドを侵し、一五八八年、その無敵艦隊を粉碎して（前章參照）より、イギリスの海軍、非常に發達し、航海・植民の業、隆然として振起したり。

文運隆盛

エリザベタの治世は、また、文藝隆盛の時代にして、詩聖シェクスピア（Shakespeare）以下、名家、多く出でたり。歸納法を唱へて、學術の研究に、一新機軸を出せるベーコン（Bacon）も、また、この時に生れぬ。

前年信長叡山を燒く

ユグノー

新舊兩派の黨爭

ユグノーの役

バルトロメオ祭日の虐殺

第四章　フランス宗派の爭

フランスには、カルビン派（一一九頁參照）の新教、行はれ、その徒をユグノー（Huguenot）と稱せり。フランシス一世、及び、その子ヘンリ二世は、政略上、ドイツの新教派を援けて、カロロ五世と戰ひしが、自國に於ては、新教を嚴禁せしかば、新舊兩派、黨を分ちて、相爭ひ、カロロ九世に至り、ユグノーの役、開かれぬ。

新教徒は、イギリス、及び、ドイツの新教諸邦の援を得、舊教徒は、法王及び、イスパニア王フィリポ二世の後援によりて、相當り、紛爭、數年に亘れり。王家、これを制すること能はず、頗る、その去就に迷ひしが、一五七二年、聖バルトロメオ（Saint Bartholomew）祭日（八月二十四日）の夜、數千の新教徒を虐殺せり。つきて、諸地方に於て、殘殺せられし新教徒、また、數萬に及び、内亂、ますます慘烈と

なりぬ。

ブルボン王朝の始め

一五八九年、バロア家の血統絶え、その支流ブルボン家のヘンリ四世、立てり。

この年豐臣秀吉死す

王は、新教徒の首領なりけれども、深く國内の情勢を察し、自ら舊教に改宗して、その徒を和げ、また、一五九八年、ナント勅令を發して、信仰の自由を許し、新舊兩教の同權を公認し、ここに始めて、數十年來の紛亂を定め、内治を改良し、王權を固定し、大にイスパニアを抑へて、國威を張るの策を講じたり。

バルトロメオ祭日夜の虐殺の圖

ヘンリ四世の治

リシュリューは家光と同時の人

前二年清の太祖始めて帝號を稱す

リシュリューの經綸

一六一〇年、ヘンリ四世の死せる後、貴族、一時、跋扈せしが、宰相リシュリュー、内、貴族・僧侶を抑へて、王權を固くし、外、ドイツ・イスパニアのハプスブルグ家に抗して、國威を揚げたり。

三十年役の原因

第五章　三十年の役 (Thirty Years War (Dreissigjähriger Krieg E.))

ドイツにては、宗教改革反動の勢、盛んにして、新舊兩教徒の軋轢、甚しく、國内、日に亂れぬ。一六一二年、フェルヂナンド一世帝の孫マチアス(Matthias)帝立ち、舊教に熱心なる從弟フェルヂナンドを、ボヘミア王となし、新教徒を抑壓しければ、一六一八年、同國人、遂に反けり。これを三十年の役の發端とす。

第一期

翌年、マチアス帝死し、フェルヂナンド、これに繼ぎ、フェルヂナンド二世と稱するや、ボヘミア人は、新教同盟の首領フェルツ選擧侯フレデリキ五世を迎へて王としたるが、帝は、イスパ

明末流賊の亂
後五年島原の亂起る

ニア、及び、舊教諸侯の援助を得て、ボヘミアを平げ、フレデリキを逐ひ、新教徒を壓したり。

第二期

當時、デンマルク王キリスチアン四世、ホルスタインの領主として、また、ドイツの一諸侯たり。王は、ドイツの新教徒を救はんと欲し、イギリス・オランダ二國の後援を得、兵を率ゐて、ドイツに侵入せしが、かへりて、帝軍のために敗られ、一六二九年、爾後、ドイツに干渉せざることを約して、和せり。

第三期

時に、スウェーデン王グスタフ=アドルフ、ドイツの新教徒を救ひ、かつ、ハプスブルグ家を抑へて、バルト海海岸の主權を握らんとし、フランスの宰相リシュリューと約して、軍資を得、一六三〇年、ドイツに攻め入りたり。

グスタフの勝利及び經綸

グスタフは、連戰連捷し、勢に乘じ、將に新教の大聯邦を作らんとせしが、一六三二年、帝軍の名將ワレンスタインと、リュ

ツンに戰ひて、これを破り、己は、遂に戰死せり

第四期

スウェーデンは、なほ、戰爭を繼續し、フランスも、援兵・軍資を送り、ワレンスタイン、また、刺客の手に斃れ、兩教徒の勢、相伯仲せしが、遂に、戰に倦み、一六四八年、ウェストファリアの和約成りぬ。

グスタフアドルフ戰死の圖

ウェストファリア條約

この條約により、フランスは、メッツ・ツール・ベルダン、及び、エルザスの大部を得、スウェーデンは、ポメラニアの西半と、その附近の地とを受領し、且、是等の地を代表して、ドイツ國會に出席する權利を得、ブ

ドイツの慘狀

ランデンブルグ、及び、その他の數邦は、その領土を擴張し、オランダ・スウィスの二國は、各、その獨立を認められ、カトリック・ルーテル・カルビンの三派は、各、同等の權利を得たり。

三十年の役の結果は、ドイツ、最も慘憺を極め、人口減少し、土地荒廢し、産業衰へ、文藝廢れ、統一、殆んど全く敗れて、神聖ローマ帝國は、有名無實のものとなれり。

第三篇　フランス強大時代

第一章　フランスの内政整頓及びその外國侵略

イスパニアの衰弱

第十六世紀より、第十七世紀の前半にわたりて、富盛を恣にせるイスパニアは、世運の一轉とともに、その元氣、大に衰へ、一六四〇年には、ポルトガルも、また分離獨立し、ヨーロッパ政局の中心は、つひに、フランスに移りたり。

ポルトガルの獨立

マザレンの經綸

フランスにては、宰相マザレン、リシュリー（一二九頁參照）の遺策をつぎ、よく幼主ルイス十四世（Louis）（一六四三―一七一五）を輔け、ウェストファリアの條約によりて、領土を擴め、なほ、イスパニアとの戰を續け、一六五九年、ピレネー（Pyrenee）條約を結びて、イスパニア王フィリポ四世の女を納れ、ルイスの皇后となせり。

ルイス十四世の隆治

翌年清の聖祖即位

一六六一年、マザレン死せり。爾後、ルイス十四世、萬機を親裁し、大に人材を登用して、益、王權を張り、ことに、コルベー（Colbert）ルに、財務を任じ、租稅を輕減し、輸入稅を重くして、國内の商工業を保護奬勵し、盛んに、航海の業をも振起したり。王は、また、しきりに、文學・美術を奬勵せしかば、コルネイユ（Corneille）・モリエール（Molière）・ラシーヌ（Racine）の如き大家を出しぬ。

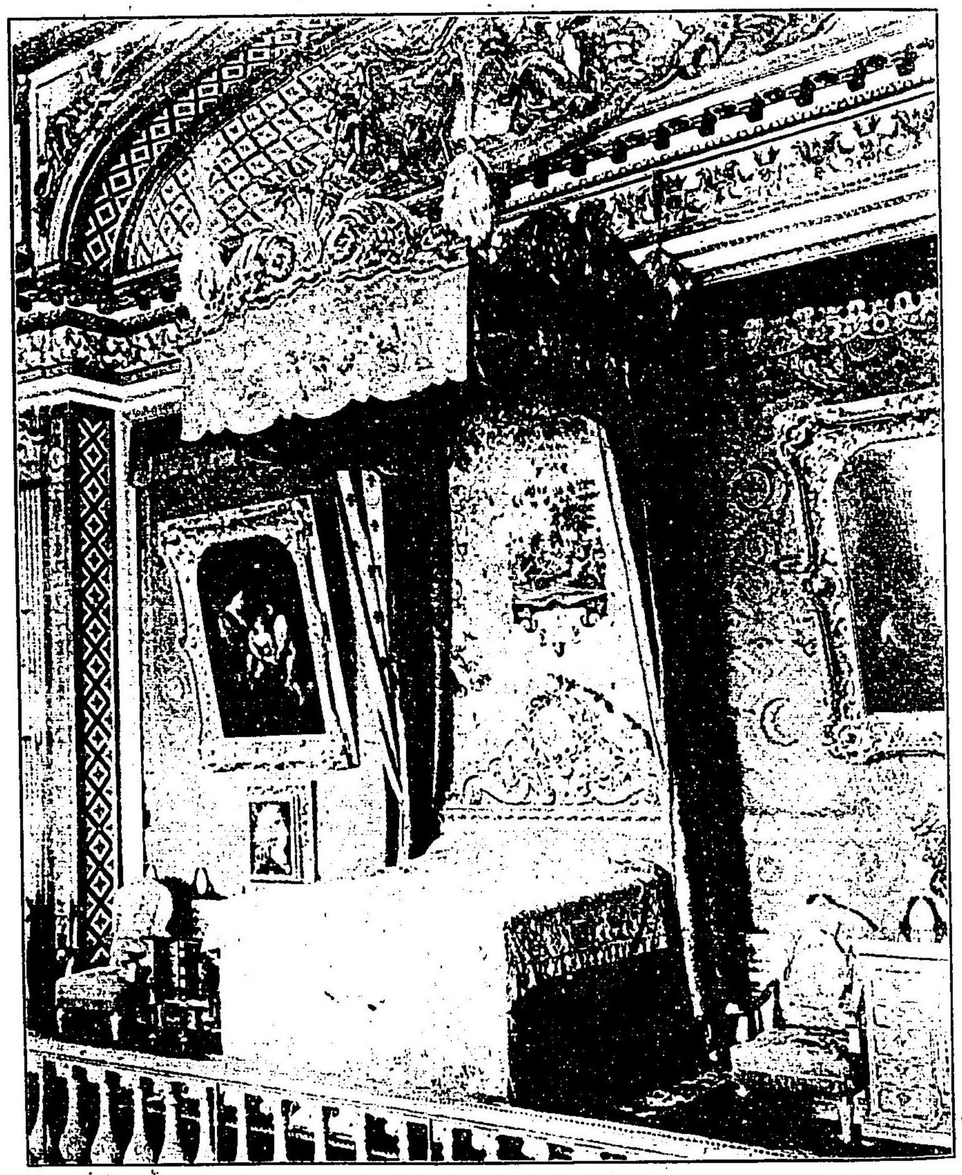
イスパニア領ネーデルランド侵攻

ルイス十四世

ルイスは、富強を恃みて、外國侵略を企てたり。一六六五年、イスパニア王フィリポ四世死し、子カロロ二世、立つやルイスは、王后の權利により、イスパニア領ネーデルランド（今のベルギー地方）を要求し、兵を出して、これを占領せり。然るに、オランダは、フランスと境を接するを恐れ、イギリス・スウェーデンと同盟して、これに抗し、ルイスをして、僅に邊境の數市を得るに止めしめたり。

オランダ侵攻

ルイスは、深くオランダの干渉を憤り、イギリス、及び、スウェーデンに說きて、己と結ばしめ、一六七二年、親ら大軍を督して、オランダに侵入したり。オランダの總督オランジ公ウィルレム三世、よく、これを防ぎ、且、巧みに、フランスの同盟諸邦



ルイス十四世寢室寫眞

ベルサイユ(Versailles)は、パリーの西南に在る小市にて、此處にある宮殿、及び、これに附屬せる大庭園は、ルイス十四世の創設にかかる。この地は、木石尠く、水利にも乏しきに、ルイス十四世は、かかる大規模の工事を起し、遠隔の地より、特に石造の橋の如き壯大なる高水道を導き、また、多くの木石等を運搬せしめ、庭園のみにても、同時に、人夫三萬六千人、馬六千頭を用ゐたることありきといふ。その費用の如き、現今の價格にして、約二億圓に垂んとしたれど、農民の賦役には、一錢をも要せざりしことを記憶せざるべからず。されば、ベルサイユは、その一木一石と雖も、君主の威勢を語らざるなしといひし者あるも、また、宜ならずや。宮殿は、柱太く、天井高く、その廣くして、かつ、大なる各室は、柱壁牖戸、皆金色燦爛として、人目を驚かす。本圖に示せるは、ルイス十四世の寢室にて、優に數人を容るべく、その天蓋、その夜具は、いづれも美麗なる刺繍を施し、柱壁の金色及び濃彩を加へたる大畫幅と相映じ、人をして、その威嚴にうたれしむ。實に、當時の君主萬能的精神を、遺憾なく發揮したるものといふべきなり。

を分離せしめ、イスパニア・ドイツ等の援助を得るに至れり。

一六七八年、ルイスは、つひに、ナイメーヘン(Nimwegen(Nijmegen))の和約を結び、イスパニアより、フランシュコンテ、その他二三の要地を得たり。

その後、ファルツ選擧侯、死するや、ルイスは、弟オルレアン公(Orleans)が、その妹婿なるの故を以て、ために、一六八八年、ファルツを略取せんとせり。この年、オランジュ公ウィルレム三世、イギリス王となり、殆んど、全ヨーロッパを合從して、ルイスに敵せしかば、ルイスは、一六九七年、ライスワイク(Ryswick(Rijswijk))の和約を結び、エルザスの一部、及び、ストラスブルグ(Strasburg)の外、悉くその侵地を還せり。

ファルツ侵略

イギリス君民の衝突

第二章　イギリス兩度の革命

一六〇三年、エリザベタ死し、スコットランド王ジェームス(James)六

この頃家光キリスト教を嚴禁す

大内亂

二派の議會黨

世、入りて繼ぎ、ジェームス一世（一六〇三―一六二五）と稱す。その治世の間、常に議會と爭ひ、また、外政に失策して、大に民望を失へり。

その子カロロ一世（一六二五―一六四九）また、激しく議會と爭ひ、かつ、國教以外の諸宗派を壓迫しければ、志士、多くアメリカに奔れり。

王は、屢、議會を解散したれども、新議會は、常に、反りて王の秕政を難じたり。一六四〇年、王は、つひに、憲法に背き、兵を率ゐて、議會に臨み、反對議員を捕へんとして成らざりき。

ここに於て、人心、大に激昂し、忽ち慘憺たる內亂となり、王は、議會軍の將クロンウェル（Cromwell）のために破られ、終に虜にせられぬ。

當時、議會黨は、プレスビテリアン（Presbyterians）・インデペンデント（Independents）の二派に分れ、前者は、高等僧官を廢し、且、君民同治を行はんとし、後者は、僧俗の別を除き、且、共和政治を施かんことを望み、そ

この年家光死す

王の處刑

共和政治の建設

クロンウェルの經綸

クロンウェル肖像

王政復舊

の爭、頗る激烈なりき。

クロンウェルは、兵力を以て、プレスビテリアン黨を壓し、共和政治を立て、王を死刑に處したり。

既にして、クロンウェル、自ら統監（プロテクトル Protector）となり、武斷政治を行ひ、舊教徒を壓し、奢侈・遊戲を嚴禁し、また、オランダとイギリスとを合して、一大共和國を建て、以て、世界の商業を獨占し、更に進みて、新教諸國の大聯合を作らんと欲し、これをオランダに交渉したり。

オランダ、これに應ぜざりければ、一六五一年、航海律（ナヴィゲーションアクト Navigation Act）を發して、その商業、及び、漁業を妨げ、遂に、これと干戈を交へて、海上の勢力を挫き、また、フランスと結びて、イスパニアを破りしが、その政令、嚴峻に過ぎ、漸く國民の厭惡を招けり。

一六五八年、クロンウェル死し、後、ほどなく、國民は、前王の子

審査律及び人身保護律

カロロ二世一六六〇―六八五を迎へて、王政を復せり。王は、素行修まらず、ルイス十四世の政略を助け、且、これに倣ひて、王權を張らんとし、舊教に傾ける觀さへありければ、議會は、審査律（テストアクト Test Act）を通過して、舊教徒の、官吏及び議員たるを防ぎ、また、人身保護律（ハベアスコーパス Habeas Corpus Act）を議決して、濫りに、人民を逮捕するを得ざらしめたり。

ホイグ・トーリー兩黨の爭

然るに、審査律を、舊教を奉ずる王弟ジェームス（James）の王位繼承權に應用することに關し、民權に傾きて、稍進歩的なるホイグ（Whigs）黨は、これを贊し、王權に傾きて、稍保守的なるトーリー（Tories）黨は、これに反對せしが、カロロ二世死後、トーリーの說、行はれ、ジェームス二世一六八五―六八八遂に王位に登りぬ。

一六八八年の革命

ジェームスは、舊教の復興を計り、審査律を無視し、ルイス十四世の賂に甘んじて、その侵略を傍觀し、且、專制主義を貫かんとせり。ホイグ・トーリー兩黨、共に、革命の慘劇を再びせんことを恐れ、王の長女マリアの夫、オランダ總督オランジュ公ウィルレム三世に乞ひて、兵を率ゐて、來らしめしかば、ジェームスは、倉皇、フランスに走り、ウィルレム三世、及び、マリアは、王位に登れり。これを一六八八年の名譽革命（Glorious Revolution）といふ。

ウィルレム三世一六八八―七〇二は、前代の弊政を改め、外交方針を一變し、權利條例（ビル・オブ・ライツ Bill of Rights）により、國民及び議會の權利を明確にし、また、專らホイグ黨の人士を登用して、政黨內閣の端を開きぬ。

元祿元年明年ネルチンスキ條約成る

政黨內閣の端緒

オーストリアの勢力增加

第三章

オーストリアは、領土、トルコ（Turkey）に接するがために、これと戰爭絕えざりしが、レオポルド一世帝（フェルディナンド二世帝の孫。）一六五九・一七〇五の時、大に勝ちて、一六九九年、ホンガリア全部、及び、トランシルワニア（Transylvania）を割讓せしめき。

イスパニア繼承の役（War of Spanish Succession）

當時、フランスの侵略は、ドイツ諸

オーストリア及びイギリスとフランスとの關係

イスパニア繼承の役の起り

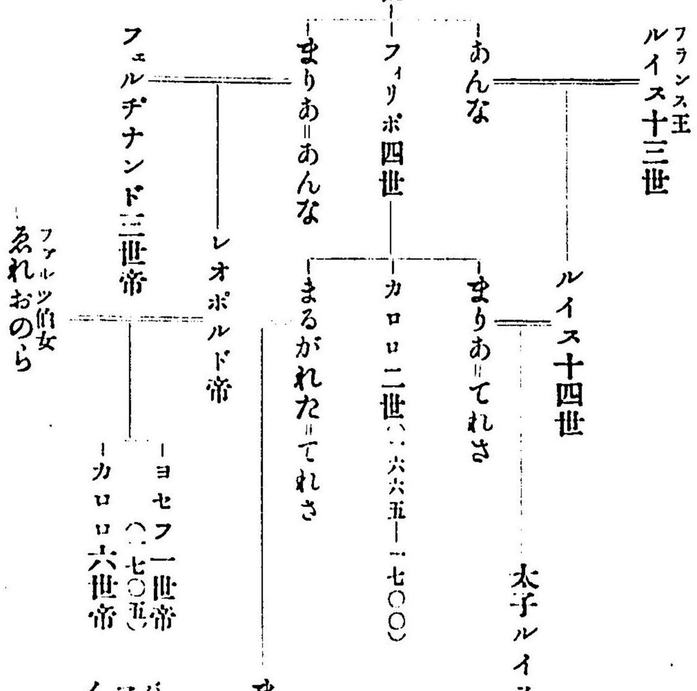
この年德川光圀死す

邦をして、オーストリアに賴りて、自全を計る心を起さしめたる際なれば、皇帝の威力は、益、加はりぬ。

オーストリアの國勢が、かくの如く盛んになれると、イギリス名譽革命の結果とは、ルイス十四世をして、その侵略の慾望を抑へしめしが、忽ち、イスパニア繼承問題起り、フランスを驅りて、殆んど、全ヨーロッパと戰はしむるに至りぬ。

初め、イスパニア王カロロ二世、病弱にして、子なく、女系の關係により、一三三頁參照ルイス十四世の孫フィリポ、レオポルド一世帝の次子カロロ等、その繼承者に擬せられき。然るに、カロロ二世は、一七〇〇年、イスパニア全領を、フィリポに讓ること、を遺言して死し、フィリポ、遂にイスパニア王となりて、フィリポ五世と稱しぬ。ここに於て、イスパニア繼承の役起り、イギリス・オランダ、及び、ドイツ諸邦の多數は、國力均衡上、フラ

五　イスパニア繼承の役關係系圖



わが元祿時代

フランスの連敗

ンスの強大を憚りて、レオポルド帝を援けたり。

一七〇二年、イギリス王ウィルレム三世死し、マリアの妹アンナ立つ。マールボロ公(Marlborough)、ホイグ内閣を率ゐて、これを輔け、自ら兵に將として、大陸に入り、オーストリアの名將サボヤ(Savoy)のエウジェニオ(Eugenio)親王と共に、到る處に、フランス軍を破りたり。

フランス國内の狀況

當時、ルイスは、騎虎の勢に乘じて、全ヨーロッパを敵とせるのみならず、内、榮華・豪奢を極めて、その威嚴を裝ひ、國庫の空乏を致せり。王は、また、統一を欲するの極、ナントの勅令(一八二頁參照)を廢して、新教徒を苦めければ、有爲活潑の新教徒、相率ゐて、イギリス・オランダ・ブランデンブルグ等に逃れ、學術に、生産に、戰爭に、大に外國の資益となりぬ。

局面一變

たまたま、イギリスにては、マールボロ、黜けられ、トーリー黨内閣成りて、平和を主張し、カロロは、また、父兄、相つぎて死

ユトレヒトの和約

せる後を承けて、帝位に即き、カロロ六世と稱しければ、そのイスパニアを併有せんことは、國力均衡上、各國に便ならぬこととなりぬ。是に於て、局面一變し、一七一三年、ユトレヒト(Utrecht)の和議成り、列國は、イスパニア・フランス二國を、永久合同せざるの約を以て、フィリポ五世の王位を認め、イギリスは、イスパニアより、ジブラルタル(Gibraltar)、及び、ミノルカ島(Minorca)を、フランスより、ハドソン灣地方(Hudson Bay)、ニューファウンドランド(New Foundland)、ノバスコチア(Nova Scotia)を得、オランダは、イスパニア領ネーデルランドの數砦を、ブランデンブルグは、プロシア(Prussia(Preussen F.))王國の稱號を、サボヤ公國は、王號と、シチリアとを得たり。翌年、皇帝も、フランスと和して、イスパニア領ネーデルランド・ナポリ・ミラノ・サルヂニアを得たり。

フランスの政弊堆積

一七一五年、ルイス十四世死し、曾孫ルイス十五世(一七一五―一七七四)つぎ、益豪奢腐敗を極め、財政紊亂し、政弊叢起して、漸く他

六　近世イギリス王室系圖（系圖第二參照）

- ヘンリ七世[15]
  - ヘンリ八世[16]
    - まりあ[18]（女王）
    - えりざべた[19]（女王）
    - まるがれた（スコットランド女王）
      - 孫 まりあ（スコットランド女王）
        - ジェームス一世[20]（イギリス王）（スコットランド王ジェームス六世）
    - エドワルド六世[17]
  - フレデリキ五世（ボハミア王）
    - ファルツ伯
    - えりざべた
      - そふぃあ
    - ハノフェル選擧侯エルネスト オーグスト
    - ジョルジ一世[26]
      - ジョルジ二世[27]
        - ジョルジ三世[28]
          - ウィルレム四世[29]
            - エドワルド[30]
            - びくとりあ（女王）
            - エドワルド七世
            - エルネスト オーグスト（ハノフェル選擧侯）
            - ジョルジ四世
  - カロロ一世[21]
    - カロロ二世[22]
      - ジェームス二世[23]
        - まりあ（女王）[24]
        - あんな（女王）[25]
          - ウイルレム三世（オランジュ公）

ハノフェル家

スチュアルト家

チュードル家

イギリスの統一及び隆運

日の亂階をなせり。これに反して、イギリスは、一七〇六年、全くスコットランドを合同して、一議會の下に、これを統一し、國勢、益〻加はり、文藝、また隆盛を極め、ポープ・アディソン・スウィフト・デフォー等の文士、輩出せり。一七一四年、アンナ死し、ハノフル選擧侯、迎立せられ、ジョージ一世と稱しぬ。

イスバニアの再振策

イスバニア王フィリポ五世は、鋭意、宿弊を除き、商業・製造を奬勵し、また、シチリア・サルヂニアを恢復せんとせしが、列國の干渉によりて、果さざりき。この時、サボヤは、シチリアとサルヂニアとを交換し、爾後、サルヂニア王國と稱せり。

サルヂニア王國

第四章　スウェーデン・ポーランド・プロシアの盛衰

スウェーデンの勃興

デンマルク・スウェーデン・ノルウェーは、第十四世紀の末に、相

合して、一王を戴くこととなりしが、一五二三年に至り、スウェーデン、分離獨立せり。一六一一年、グスタフ・アドルフ（一三〇頁参照）位に即き、大に政法を改良し、國力を培養し、精鋭なる軍隊を率ゐて、ロシア・ポーランドに勝ち、また、三十年の役に加はれり。王、つひに戰死したれども、ウェストファリア條約により、スウェーデンは、ポメラニア（Pomerania）西部を得たり。

ポーランドの國情

ポーランドは、一時、東方の最強國なりしが、（一〇四頁参照）國内、統一鞏固ならず、一五七二年、選擧王國となりしより、王權振はず、その選擧毎に、外國の干渉を招き、國會は、紛擾を極めて、施政の方針、確立せず、貴族、ひとり跋扈して、平民、甚しく壓制せられ、諸種の殖産、みな衰へたり。

ブランデンブルグの勃興

ブランデンブルグ選擧侯は、ドイツ北部の一諸侯なり。一六一八年、ポーランド王の臣下となりて、プロシア公（一〇四頁参照）に封ぜらる。選擧侯フレデリキウィルレム、聰明にして、三十年の役に功あり、ウェストファリア條約により、ポメラニア東部、その他二三の領土を得たり。一六五四年、スウェーデン王カロロ十世の、ポーランドを侵すや、フレデリキウィルレムは、初め、スウェーデンに與し、既にして、プロシアの獨立を認めしめて、ポーランドを援けぬ。

フレデリキウィルレム大選擧侯肯像

ブランデンブルグ・スウェーデンの衰盛

カロロは、ために、志を得ずして、一六六〇年に死し、その子カロロ十一世に至りて、和を結べり。

これより、フレデリキウィルレム、及び、カロロ十一世は、各、ひとしく、意を内治に注き、君權伸張、行政改革、殖産振興、軍備擴張を圖り、共に、着着、その功を奏せり。

プロシア王國の始め

その實力培養

フレデリキ=ウィルレムの子フレデリキ三世一六八八―一七一三に至り、イスパニア繼承の役に、ドイツ帝を助け、その贊同を得て、始めて、プロシア王と號し、フレデリキ一世と稱せり。その子フレデリキ=ウルレム一世一七一三―一七四〇、勤儉・尚武を勵まし、冗員を淘汰し、行政を敏活にし、教育の普及、及び、實業の發達を圖りしかば、國力、ますます充實せり。

第四篇　ロシア・プロシア發展時代

第一章　北方の役 Northern War　ポーランド繼承の役 War of Polish Succession

ロマーノフ家

ロシアは、一五九八年、ルーリク家絶え、一〇四頁參照内訌の後、一六一三年、帝位、ロマーノフ家 Romanov に歸し、數世を經て、ペテロ一世 Peter (Ujotr n) 大帝一六八二―一七二五に至れり。ペテロは、ロシアが、未だ良港を有

ペテロは清の聖祖及びわが德川吉宗とほぼ同時の人

ペテロ大帝の維新事業

せざるを慨し、アゾフをトルコより奪ひ、つぎて、オランダ・イギリス等の諸國に遊び、造船術、及び、諸種の技藝を修めて歸國し、制度・風俗・文物、皆、西ヨーロッパの風に則り、學校を開き、工業を起し、印刷所を設け、陸海軍を整備し、また、自らギリシア正教首長を兼ねて、政教上の主權を握り、文武百官を督勵して、一新の大業を斷行したり。

ペテロ大帝及びその職工として住みし家　家はオランダのザーンダムにあり粗末の木造にて今ロシア帝室の所有なり

對スウェーデン三國同盟

ペテロは、バルト海に門戸を開かんとし、デンマルク・ポーランドと結び、相共にスウェーデンを伐ち、各、自國に接近せるバルト海沿岸の地を奪取せんとせり。然るに、スウェーデン王カロ

後二年大石良雄等復仇す

カロロの雄飛

ロ十二世一六九七一七一八は、即位の時、年僅に十五歳なりしが、非凡の將才あり、一七〇〇年、大にデンマルクに勝ちて、和を請はしめ、轉じて、ナルバ(Narva)を圍める、ペテロの軍を粉碎し、勢に乘じて、ポーランドを略したり。この間、ペテロは、大に兵を練り、

ペテロの剛強

フィンランド地方を征略し、ペテルブルグ(Petersburg)府を新設し、ナルバ(Finland)を取り、以てバルト海東岸の主權を固めき。

ポルタバの戰

既にして、カロロ、再びロシアを侵すや、ペテロ、鋭を避けて、その糧道を絶ち、一七〇九年、大にこれをポルタバ(Poltava)に破れり。カロロ、トルコに走り、これを煽動して、ロシアを討たしむ。ペテロ、利あらず、アゾフを還附して、トルコと和せり。一七一四年、カロロ、歸國せしが、後、三年、遂に戰死せり。

北方の役の終局

是に於て、スウェーデンは、一七二〇年、さきにロシアと同盟したるハンノフル、及び、プロシアに、バルト海の南岸を割與し、翌年、また、バルト海東岸の地を、ロシアに與へ、所謂北方の役の局を結びたり。これより、スウェーデンの國勢、大に衰へ、ロシア新興の勢、益、加はりぬ。

ポーランド繼承の役

一七三三年、ポーランドの王位繼承に關して、各國の干渉あり。ロシアの女帝アンナ一七三〇一七四〇は、ドイツ帝カロロ六世と共に、サクソニア選擧侯オーグスト(August)を推し、フランス王ルイス十五世は、イスパニアと協力して、その舅スタニスライ(Stanislas Leszinski)レスチンスキを立てんとし、遂に大亂を釀せり。一七三八年、ウィーンの條約成り、オーグスト、王位に登り、レスチンスキは、死後、フランスに合併せらるべき約を以て、ロートリンゲ(Lorraine(Lothringen E))ンの公となり、オーストリアは、パルマ(Parma)・ピアチェンツァ(Piacenza)を取り、ナポリ・シチリア・エルバ(Elba)を、イスパニアの王子カロロに讓り、ナポリ王と稱せしめき。

清の高宗
わが徳川吉宗の時

プラグマチッシェ・サンクチオン

プロシアのシレシア占領

第二章　オーストリア繼承の役　七年の役
War of Austrian Succession　Seven Years War

ドイツ帝カロロ六世、男子なきを以て、オーストリアの全領を、その女マリアテレサに讓らんと欲し、列國が、家憲プラグマチッシェ・サンクチオン(Pragmatische Sanction)を承認せんことを希望したり。然るに、一七四〇年帝、死するや、バワリア(Bayern)選擧侯カロロアルベルト(Albert)は、フランスの後援を得て、繼承權を主張し、サクソニア選擧侯オーグスト(兼ポーランド王)イスパニア王フィリポ五世も、また、各、要求する所ありき。

この年、プロシア王フレデリキ・ウィルレム一世死し、その子フレデリキ二世大王(一七四〇―七八六)立ち、雄材にして大略あり、この機に乘じ、突然、シレシア(Silesia)を占領し、その割讓を求めたり。マリアテレサ、聽かざりければ、乃ち、フランス・イスパニア・バ

諸國の對オーストリア同盟

マリア・テレサ肖像

ワリア・サクソニア等と同盟して、オーストリアを擊てり。オーストリアには、イギリスの援助ありたれども、同盟軍の勢、盛んにして、カロロアルベルト、皇帝に選ばれ、カロロ七世と稱せり。

然るに、マリアテレサは、更に落膽することなく、よくホンガリア人等の忠勇に訴へて、漸く勢を恢復し、また、シレシアを割きて、プロシアと和し、つぎて、連りに同盟軍を破りき。

アーヘンの和約

プロシア王は、オーストリア軍の勢、日に盛んなるを見、シレシア領有の、或は危からんを恐れ、再び、オーストリアを攻めしが、一七四八年に至り、アーヘン(Aachen)の和議、始めて成り、列國は、プラグマチッシェ・サンクチオンを承認し、オーストリアは、バ

ルマ・ピアチェンツァ(Piacenza)を、イスパニア王子フィリポに與へ、プロシアは、豐沃肥美なるシレシアを得て從來の人口の半を增加し、益國政の改良、人民の富盛を計り、國運、駸駸として進歩せり。

これよりさき、一七四五年、カロロ七世死し、マリア・テレサの夫フランシス一世、選ばれて帝位に登れり。

マリアテレサの對プロシア策

マリアテレサは、繼承役後、プロシアに倣ひて、大に內政を改革し、以て、徐にシレシア恢復の策を劃し、まづ、ロシアの女帝エリザベタ(一七四一―一七六四)サクソニア選擧侯兼ポーランド王オーグストと結べり。

フレデリキ大王肖像

たまたま、イギリス・フランス二國、北アメリカに於ける、植民政策の衝突より、遂に戰端を開き、イギリスは、フランスが、ハンノフェルを占領せんことを恐れて、ロシアと同盟せしかば、オーストリアは、フランスに說き、ロシア・サクソニアと共に、對プロシア同盟を作りたり。

フレデリキの苦戰

フレデリキ二世、これを知り、機先を制し、一七五六年、サクソニアを攻めて、これを占領し、イギリスより、軍資を得て、ロスバハ(Rossbach)、その他各處に奇勝を制したり。既にして、衆寡敵せず、僅かに防禦の位置を保ちぬ。一七六一年、イギリスの宰相ピット(Pitt)、職を辭するに及び、軍資の供給、また、絕え、フレデリキの窮厄、その極に達したれども、王は、つひに屈せざりき。

フベルツスブルグの和約

一七六二年、エリザベタ死し、ペテロ三世、これにつき、プロシアと和して、これを援け、一七六三年には、イギリス・フランスの間に、また、パリーの和成り、フランスは、その一條件として、ドイツより撤兵せしかば、形勢、ここに一變して、同年、フベルツスブルグ(Hubertusburg)の和約成り、更にプロシアのシレシア領有を

七年の役の影響

確定し、プロシアは、選擧侯として、マリア・テレサの子ヨセフ Joseph 二世に投票する事を豫約し、ここに七年の役の局を結びぬ。

この役や、プロシアは、寸土を得ることなしといへども、獨力、よく列國の攻擊に當り、七年の久しきに堪へたるを以て、大にその國威を發揚し、他日、ドイツに覇たるの基を開きぬ。

フレデリキの戰後經營

フレデリキ二世は、戰後、孜孜として、プロシアの疲弊を恢復することを力め、租稅を輕減し、農民を保護し、實業を奬勵し、軍備を擴張し、司法を公平にし、文學・美術を助長したり。

第三章　オランダの不振　イギリス・フランス植民政策の衝突

オランダの國勢不振

オランダは、第十七世紀の前半に、隆盛の極に達し、一二三頁參照その航海・通商の繁昌、天下第一と稱せられしが、國内に黨爭

ありて、國是を誤れると、各國に保護政策の起れると、ルイス十四世の侵略一三四頁參照ありし後、平和縮小主義に偏せるとのために、勢威、漸く振はずなりぬ。

イギリスのアメリカ領土

イギリス・フランス二國は、オランダと同じく、早くより植民策に着眼せり。アメリカに於て、イギリスは、ニューファウンドランド New Foundland を始めとして、ニューイングランド諸州 New England States・南北カロライナ North Carolina・ペンシルバニア Pensylvania・ジョージア Georgia 等を創め、イスパニア・オランダより、ジャマイカ Jamaica・ニューヂャーシー New Jersey・ニューヨーク New York・デラウェア Delaware 等の地を奪ひ、第十七世紀の後半には、北アメリカ東海岸中部一帶の地を領したり。

フランスのアメリカ領土

フランスも、また、今のイギリス領 British America アメリカ東部に植民し、ケベック Quebec・モントリオール Montreal に城き、ルイス十四世の時、更にミシシッピ Mississippi 河の兩岸を領有して、ルイジアナ Louisiana と命名し、西インドの

東方に於ける兩國の領土

マルチニク(Martinique)以下數島をも購買せり。

東方にては、その始め、イギリス・フランス、共に甚しくオランダ人に妨害せられしが、インドのモンゴル帝國の衰弱に乘じて、イギリスは、第十七世紀に、マドラス(Madras)・ボンベー(Bombay)・カルカッタ(Calcutta)を得、フランスは、同世紀にチャンデルナゴル(Chandernagor)・ポンディシェリー(Pondicherry)を得たり。

兩國植民地の衝突

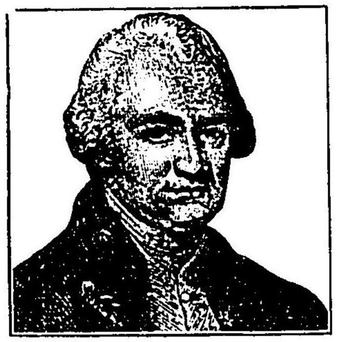
以上兩國の植民地は、アメリカに於ては、その境界、判然せず。インドに於ては、その競爭、烈しかりしを以て、第十八世紀の中頃より、兩強東西植民地に於ける爭端、漸く滋くなりぬ。フランスのインド總督デュプレース(Dupleix)、一七四六年、マドラスを略取し、勢、大に張りしが、會〻アーヘンの和約(一五一頁參照)成り、兩國、互に侵地を還せり。

アメリカに於けるイギリスの勝利

既にして、植民地の衝突、また起りしが、フランスは、七年の役、始まるや、專ら、力を大陸に於ける對プロシア戰爭に用ゐ、イギリスは、フレデリキ二世に、軍資を給して、大陸の運動を一任し、以て、全力を植民地侵略に注ぎ、海軍を以て、海上を制し、一七五九年、ケベックを拔き、つゞいて、モントリオールを陷れ、悉くカナダを領有し、西インドのフランス領をも奪へり。

インドに於けるイギリスの勝利

インドに於ては、デュプレース、連りに勝を制し、その地を擴めたり。時に、イギリス人クライブ(Clive)、身を東インド商社の一書記に起し、大に敵を破り、デュプレースの召還せられたるに乘じて、チャンデルナゴルを奪ひ、一七五七年、フランスと同盟したるベンガル(Bengal)の國主スラジュー・ダウラー(Suraju Daulah)の大軍を、プラッシーに破り、ベンガルを保護國とせり。



クライブ肖像

パリー和約の結果

一七六三年、パリーの和約（一五三頁参照）成りて、イギリスは、フランスをして、カナダ（Canada）・ケープブレトン島（Cape Breton）・グラナダ島（Granada）・セネガル（Senegal）を割譲せしめて、チャンデルナゴルを還し、イスパニアをして、フロリダ（Florida）を割譲せしめて、キューバ（Cuba）を還附し、フランスは、ルイジアナをイスパニアに譲りぬ。

イギリスのインド領擴張

後、アメリカ合衆國獨立の役の時、東インドのイギリス領總督ヘースチングス（Hastings）、大に土人の諸侯、及び、フランスの援軍を破りて、その領土を擴めたり。

第四章　ロシアの侵略　ポーランド滅亡

カタリナ女帝の雄圖

ロシアの女帝カタリナ二世（Catharine (Ekaterina II)）一七六二―一七九六は、稀有の女傑にして、大に西ヨーロッパの學藝を輸入し、法律を改正し、殖産を盛んにし、その他百般の改良・進歩を計れり。女帝は、また、ペテロ大帝の遺圖をつぎ、大に、志をトルコ・ポーランドに伸さんとし、まづ、ポーランドの王位繼承に干渉し、己の寵臣を選立せしめて、これを屬國視せり。ポーランド人、憤慨し、相合して、これに抗し、ロシアの強大を憚れるトルコの援助を得たり。

清の高宗

わが德川家治の時田沼父子權を專らにす

カタリナ二世肖像

カタリナは、乃ち、まづ、ポーランドを併せ、つぎて、トルコを侵略して、遂に、都をコンスタンチノプルに遷さんとの大望を起せり。

ポーランド第一分割

然るに、プロシア・オーストリア二國は、ロシアの、獨り強大なるを憚り、ポーランドを分割して、國力の平均を保たんと欲し、一七七二年、三國間に第一回の分割（First Partition）を行ひ、各、その國境に接する地を奪取したり。その後、カタリナは、つひに、トルコより、悉く、黑海北岸を略取しき。

バワリア繼承の役

ヨセフ二世帝（一七六五―一七九〇）は、急進的意見を抱き、プロシアに倣ひて、施政の改良、領土の統一・固定を計り、また、隣邦蠶食の志あり、一七七七年、バワリア選擧侯の死せるに乘じ、その一部を占領したり。フレデリキ二世、ロシアの後援を得て、これに反對し、バワリア繼承の役、起りしが、一七七九年、ヨセフ、その要求を讓りて、和成りぬ。

ドイツ王公同盟

つぎて、ヨセフは、ロシアのトルコ侵略に反對せざるを約して、プロシアと絶たしめ、バワリア選擧侯に談じ、その地をオーストリア領ネーデルランドと交換せしめて、以て、領土の聯續固定を完成せんとせり。フレデリキ、乃ち、一七八五年、ドイツ王公同盟（フュルステンブンド Fürstenbund）を結び、これに反對しけるが、兩雄、相つぎて死し、レオポルド二世帝、兄につぎて立ち、事、遂に止みぬ。

ポーランドの第二分割

ポーランドの志士は、第一分割の後、國權の恢復を圖り、一七九一年、新憲法を制定せしに、カタリナは、一派の貴族を煽動して、これに反對せしめ、つひに、プロシアと共に、兵を出して、一七九三年、第二回の分割を行へり。その後、コッシューシコ（Kosciusko）等の名士、義旗を擧げしが、ロシアは、プロシア・オーストリアと聯合して、これを討ち、一七九五年、第三分割の協商成り、翌年、これを執行せり。ポーランドは、建國より七百二十年にして、遂に亡びぬ。

高山正之蒲生君平と同時の人

ポーランド第三分割

コッシューシコ肖像

ロシアの探檢拓殖

ロシアは、また、第十六世紀の中頃より、シベリア（Siberia）拓殖に着手し、大にコサック（Kosak）を派して、漸次、これを探檢征服せしめ、屢、清國と衝突せしが、一六八九年、ネルチンスキ（Nertschinski）條約成り、その境界、確定せり。爾後、ロシアの探檢拓殖、益、進み、つひに、アレウト（Aleutian Islands）